手に何か獨りでしやべつて居る。床の邊に行つて「今晩は」といふと、笑つて人形を見せる。それから兩親はこちらの部屋で自分と食事をしてをる間も、エヴリヌはまだ眠らないで、獨りでしやべつたり歌つたりして、時々おつかさんを呼ぶ。その中に寢入つたと見えて、聲もしなくなる。食事の後には、ガルニエ夫婦と欄干に出て、北はパンテオンから、東は植物園に連るパリの市街に段々あかりのつくのを見て、色々の話しに時を經た。終りには、細君が特に古風な寺の音樂をピアノに合はせて歌つてくれて、それでこの親しくした家族に別れをつげて歸つた。旅でも異鄕でも親友は出來る。世の中に鬼はないこちらが可愛がれば子供は直にそれを知つてなづく。考へながら冬の日に度々通つた古風なローモン町を家に歸り、ガルニエの家族にも暫くは會へないと思ふと何となく物淋しくなつた。

カトン(M. Kahn)氏には歸つた日に直に行つて見たが不在で、その

次の日に會ひ、又五日の日曜には、ブローニのクラブで會つて旅行中の話しをした。いつ會つても子供の樣な顏をしてにこ〳〵してをる。歸りには坊や二人にといつて立派なパリのレースをくれた。

ブローニのクラブに行く。朝にはルシーフォサリユといふ、日佛協會の幹事に會つて、日本での會の組織の事など話し、それから電車でブローニに行つた。ボアの森とセイヌの河との間、青木の影に綠の草、日曜の休みに、一家擧つて辨當を持つて出かけて木蔭に樂しさうにしてをる。勞働者の家族もあれば、その先には河端に立派な別莊も建て並んで居る。貧富樣々でも、知足の人には幸があらう。サンクルーの森も一目綠になつて、河にはボートを漕ぐ人もある。クラブの會員の人々にも會ひ、改築した日本庭の間を逍遙して、皆に別れを告げ、ノガロ君(M. Nogaro)と二人でセイヌの河船に乘つてパリに歸つた。河上の初夏の景、どこも綠の世界。

七月七日。　パリの最後の日、追懷。

今晩はパリの最後、半ば故郷の樣になつたパリもあすは去る。而して此も半ば故郷に似たロンドンに行く。

午前はセナル氏を訪問するつもりであつたが、旅行中ときいて止め、午後上田敏君とそこらを散歩した。冬の間、毎日枯木の間を散歩したリュクサンブールの公園は綠蔭花香の園になつて、樂隊の演奏があり、散歩の人が園に充ちてをる。大通りの並木道の繁華も暫くの見納め、河端から見たパリの夏景色を去年の冬に着いた時の夜の景色に比べて、四季折々のうつり換はり、流水に似た人生の行路、色々の感が起る。

夕食の後、五階の綠側からパリの市中を見下して、何となく離愁を催する。部屋に歸り、孤燈に對して、前後四ヶ月のパリ生活を思ふと、

離愁の外に深い喜びがある。カーン氏の人となりに接してはこの旅行をさせてくれた恩人としての外に、深い感化を得た。銀行家で財界に活動する人が、一點私利の念がなく、世界のため人類のため、近くは又朋友のために色々配慮して、クラブには常に人を招ぎ、音樂者を保護して、多忙の中にも常に人の世話をやく。クラブの隣りに「子供の家」を建て子供の遊び場にして、その家具の買物なども皆自分で出かけて行つて、此れがよいあれがよいと配慮する。而して、自分の生活はといへば、質素な家に住むで、肉も食はず酒も飲まず、自分の樂みは只人を集めるのと、音樂をきくのと、時々旅行をする外に何もない。いつ會つても小な丸々したからだに、子供の樣な目つき、布袋の樣な顏をしてにこ〳〵してをる。かういふ人の世話になつた外、その人を知り得たのは實に幸であつた。カーン氏とは何度共に音樂をきいたか、その度毎に二人とも瞑目して樂をきゝ、その間には共に

莞爾として無言の話しをした。その多幸の日はパリの生活中最も愉快の時であつた。

カーン氏に次いでは、ガルニエの一家、哲學や文學の趣味で二人は一致し、話の上、旅行中の書信往復で二人は互によく領解した。夫人も時々宗教の話しをし又喜んで遠遊の客をその家に迎へて慰めてくれた。その子のエヴリヌは、どうしたか始めの時から日本のおぢさんが好きになつて、最良の友になつた。ガルニエの家に行つてくらした幾日、子供の相手になつて自分も子供に返つた度々の喜び、何れも忘れ難い追懷の種である。

學問の方では、ソルボヌ(Sorbonne)やその他色々の學校や講演會の講義に行つて、活潑なパリの學問生活を見て、こゝにも有益の教訓を得た。ベルグソン(Bergson)の趣味のある哲學、ポアンカレ(Poincaré)の仙人の如き人となりや、その數學の講義、ラデウムを發見して、學問

に大變化を與へたキユレ夫人(Mme. Curé)の實驗や講義。その外、カトリク學校(Institut Catholique)の講義、寺々の説教、古いゴシク寺の中で高い柱や天井の下、窓ガラスの暗がりの中での瞑想祈念、乃至はセイヌ河上あちらこちらの散歩。數へて見れば、人にも天然にもパリから大きな教訓も得た、感化も得た。只自分自らのした事業を云へば、僅の讀書、幾分かの執筆講演の外には、只人々に接して眞摯に話しをして日本人の肝膽を吐露して、こちらの心情を知つて貰ふとしたのみ。此れといふ事業も勤勞もなしに送つたが、健康を損せず、無事に月日を送り得ただけを喜びとしなければならぬ。

考へつゝ窓の外を眺めると、曇つた空にまだ半弦の月光が殘つてをるらしく、その間にパンテオン(Pantléon)の高塔が空に聳える。あの下には、ルソーも居る、ユゴーの遺骸が横はる、フランスの過去百年の光榮をその堂宇の下に宿してをる。革命の大波瀾を經て、榮枯變

遷の幾何かを經たフランス人は、今も尙やはり直情の人民、idée の民である。意氣は昔よりは衰へたであらうが、信ずる處を貫き、考へついた事を實行しなければ止まぬ性情は、今も尙活動してをる。政治や社會や宗教の上で色々の動搖があつても、その動搖、その戰鬪が即ちフランス人の生命である。考へて見ればフランス人はイギリス人の樣に尊敬すべきよりは、寧ろ同情すべき人民である。フランス人は西洋に於ける日本人の兄弟であらう。

七月八日。 海峽を度つてロンドンへ、友人の邂逅。

愈よパリを去る。疊つて涼しい、馬車の上では外套を着る。並木の大通りを過ぎてステーションに着き。山崎君等に見送られて、十時前にパリを離れた。パリの最後の眺めは、モンマルトルの高塔、それも見えなくなつて、汽車は疾驅して北に向ふ。カレーに來て船に乘

る、つゞいて乘船する人の中にガフ(Gough)が居た。互に手を握り肩をたゝいて偶然の再會を喜ぶ。ガフはその友人のサモンド夫婦と一緒にスイスに行つての歸りだといつて、それから一行が一つの場所に椅子を集めて、互に旅行の話し、又一別以來の話し。イギリスに行つては、元居たジェームスの家はお母さんがなくなつて、昔の樣にその家に泊る事は出來ない。ガフはそのおとつッさんを失つて、今は母親と二人でレドヒルの家に居る。イギリスでは、そのレドヒルの家に行くのが一つの樂みであつたが、この船で突然に逢はうとは思はなかつた。

その中に、船は港を出る。西北の風が強くて、時々甲板に浪をかぶる。船はゆれても浪はかぶつても、こちらは話しに熱して、時のたつのも忘れる。その中にフランスの海岸は遠くなり、行く手にイギリスの海岸の白石灰の絕壁が見え出す。七年前にハリチから始めて

イギリスに着いた時もこの眺め。アルビオン(Albion,白島)の名はその實を表はして、その眺めを見ると、半ば故郷のイギリスに歸つた心地がする。その中にドヴー岬の上の古城も見え出す。ガフはその古城のロマ以來の歴史を語つてくれる。カレーを出て一時と二十分、船はドヴーの港に入つて、皆と共に上陸する。その前から雨が來た。六年前にイギリスを去る時には、秋雨の中にアルビオンの島影の消えるのを見て孤獨の旅の心淋しく感じたが、今日は同じ雨中でも、親友と共にその島に上陸する。一生の間に人間は幾度此の樣な離合をする事か。

皆と一緒に汽車に乘り込むと、ボイが茶を賣りに來た。大きな籠に急須から皿まで揃へて、立派な茶、イギリスに來て第一によいのはよい茶の飲める事である。暫くは海岸を沿ふて後、路はケントの果樹の畑に入る。青みの茂つた木立の間には牧場があつて、羊が群を

なして居る。ガフの家に泊つてサンモンド氏の牧場に行つた時の景色そのまゝ。イギリスの此の邊の景色はどこまでも親しげなHomeといふ感を與へる。

汽車の二時間も話しの中に過ごして、聖ポールの塔が見え出し、汽車はロンドン藏家の上を走る。テームズの河を渡る時、議會の建物を一瞥してステーションに着き、ガフ等に別れてガワー町の下宿に着いた。夕食前に散歩に出て見ると、總て昔なじみの處、そこらの人のロンドン英語、町の角々に立つて居る背の高い愛くるしい顔をした巡査、ドテンハム通の馬車、何となしに總てが再會を喜び迎へてくれる樣にある。土井君と二人でイスリントンに住んで、市中に出るには毎日辻馬車の屋根の上から眺めて通つた邊りの景は少しも昔にかはらぬ。只ユーストンの四辻で狹くなつて昔は混雜した處が市區改正が出來て廣くなり、少し勝手が違ふ樣になつて居る。そこ

らをあるくと、今までは一度も思ひ出さなかつた家々や、店の名を見て昔を思ひ出す。土井君が通る度にあさつた古本屋も昔のまゝ、度度晝飯に行つた店も少しも變つて居ない。只變つたのは自分の住居、ジェームスのお母さんが親切にしてくれた家に歸つたのでなく、今は下宿に住むでをるのである。故郷に歸つた樣でも、この故郷にもやはり無常の愁はある。

七月九日から十二日。　再びロンドンの生活。

到着の翌日(九日)には直にブリテシ博物館に行つた。アマラワテーの彫刻やギリシャの古瓶など、一々昔の記憶を呼び起す。思ひ出しもしなかつたが、そこに行けば、自ら足はその方に向つて、ホールの居る室の戸をたゝく。ホールは出て來て「何年目になるかね」といふのが初めの挨拶。ガフに次いでの親しい友に會つて、一別以來の話

し。友人の居る處はどこに行つても故郷がある。ホールに別れて正金銀行に行き、歸りは馬車の屋根からホルボーンの通を見物。

午後はそこらの町々を散歩する。どこにも見覺えの店や家、タイムス社の書店に行つて本を買ひ集め、それからリゼント公園に行つて讀書。アウグステンの告白狀を綠蔭で讀んで居ると、椅子の隣りに一年になるかならずの、赤ん坊を車に載せて居る。赤ん坊が頻りにこちらを見て居るから愛してやると笑ふ。赤ん坊を見ながら、アウグステンの、自分が乳兒であつた時の告白を讀む。この赤ん坊も大きくなつてどんな一生を經るかと感じは一層深い。

主なる神よ、汝は我が孩兒なりし時に生命を與へ賜へり。汝の與へ賜ひし身體に感じを備へ、その四肢を完うし、その構造を美うし、その幸ひと安全とのために生命の活動を賦與し賜へり。その神にこれ等の賜を感謝し、我が總ての罪を汝に告白せん、是れ最と高

き神の命なり。

アウグスチンは生命の親である神に對して、全く子供の心になつて、總ての罪業を自白して、その告白を後世に傳へ、幾千萬の人に同じ懺悔をさせた。此の樣に自分の告白で、人を感化するのは固より特別の偉人の事であるが、自分も人も常に子供の心になり、親の前に內心を告白し、親の慈悲に接したいものである。

公園から歸ると、丁度高橋君がケンブリッジからやつて來た。共に散步して昔ジョンソンの始終行つたといふ料理屋 Old Cheshire Cheese に行つて食事をした。こゝもホールと屢ば來た處であるが、二百年來の古風相變らずで面白い。

十日の朝には、高橋君はパリに向つて去つた。曇天で時々雨が來る。少し散步に出た外、終日讀書。

十一日は曇天ながら雨はない。キユに行つて中村君を訪ひ、それ

からキユ (Kew) の植物園で晝食。鬱蒼とした木々の間には青々した芝草、その中に建てた田舍屋で食事をしながら、餘つたパンを投げてやると雀が集まつて來る。フランシスの樣に雀に說敎は出來ないが、雀と食事を共にして廣々とした大庭の風を吸ふ心地よさ。食事の後、庭の中のあちらこちらで、或は柏の老木の蔭、或はロドデンドロン(躑躅の種類)の叢、又は水鳥の泳ぐ池の汀、又はテームスの河岸の草のしとね、寢たり起きたりして讀書する。そうして半日は全く天然の綠の間に逍遙しつゝイギリスの敎會問題を研究して、宿に歸つたのは日のくれ。

十二日は日曜、シテ・テンプル(City Temple)でカンベルの說敎をきゝに行つた。時間前から人がよせかけて、寺の入口は芝居の入口の樣に人の列を作つて這入る。中に這入ると二千近くの座席は殆ど滿員、正面の樂器の前には黑白のガウンを着た男女の唱歌隊、その下の

講壇には半白や白髪の老人が嚴然と席を占め、聽衆は何れも上品な人々で、婦人の方が少し多いが、男も中々多い。今まで半年の間見て來たカトリクの寺の奥ゆかしさはないが、その代りに、總ての光景が活き〳〵して居る。讃美歌や朗讀が終つて、說敎師が壇に立つ。半白の髪のふさ〳〵した頭に、痩せて靑みを帶びた顏に、眼の光りは鋭い人。それが即ち「新神學」で二三年以來有名になつたカンベル氏(Rev. Campbell)。ルカ傳にある「主の驢」から說き起して、マタイ傳のと比べ、簡單に本文批評の問題、新約書の新古の分の批評をして、それから愈よキリストの信仰に入る。「吾々の宗敎信仰は新しい問題を解くべき境遇に進みつゝある。キリストの信仰は今まで色々の時代に各その時代に應じた敎訓を人に與へて來たが、吾々は今や全く新な方面からキリストの信仰の上に吾々の信仰を造り上げなければならぬ」云々。說敎の壇上から此の新神學をきくのは、イギリスか日本

の外にはなからう。「この前は神の裁判の事を述べたが、今日は神の性質に入らう。今までのキリスト敎者、又諸君の多數の念頭にある神は、果してキリストが「我等の父」と呼んだ神であらうか。多くの人は神を人間の大なるもの、威力と光榮と智慧との宏大な君主、天の上に玉座を占めて世界を作り、人界を支配する君主の如くに想像して居やう。然しキリストの神は此の如き神であつたか。キリストは屢神の國を說いたが、その國の君主でなく、我等の父の神を我々に示し、その神の完きが如く我々も完かれと敎へた。彼れの見た父は單に男でなく、女でなく、又中性の抽象でもなかつた。我々の生命の親、愛情の源泉、我々の心情の奥に宿る靈であつた」。此になつて今まで冷靜に說いて來た口調に熱情がこもり、柔かでしとやかであつた聲に力が出て來て、さすがは當代の說敎者、多くの人を引きつける人の雄辯が現はれて來た。それから或る子供の言ひ表はした神の信仰

をキリストのに比べ、遠い天上でなく近い我れ自身の中に求めるべき神を滔々と演べて終つた。この前に、こゝでバーカーの說敎をきいた時には、只熱情の說敎であつたが、カンベルの熱情には考慮思想の深みが加はつて居る。二月にヒッバート雜誌から批評をしてくれといつて送つて來たThe Advent of the Father といふ本の思想も大體はカンベルのと同じであつた。その本を見て、キリスト敎、特に組合敎會の中には、殆ど法華經の如來に近い神の信仰が成熟して來て居るのを見たがその信仰がどれだけ一般の信者に入り込んで居るかと疑つて居た。こゝに來て、その疑は半ば散じた。多數の人はまだこの說敎の樣な神を見ないにしても、カンベルのこの信仰から出る說敎が、此れだけ多く熱心の聽衆を引きつける點から見ても所謂る「新神學」の氣運は單に机上の論でなく、イギリスの樣な保守的の國にも、一般の人々の間に勢力を得かけて居る。こゝになればキリス

ト敎と佛敎とは只名の違ひでなからうか。

讃美歌や祈禱の濟んだ後人々の散ずるのを待つて、牧師室に行つてカンベルに會ひ、水曜にはその家に行く約束をして歸つた。

午後は又雨、籠つて讀書。

夕方には少し散步して後、メリボーンにある、國敎派の聖三位の寺に行つた。こゝの參詣は殆ど婦人ばかり、男では意中の娘の御機嫌取りに參詣するらしい若い男が六七人、何れも中等以下の人達。儀式は國敎の風で中々複雜に、總てがカトリクに似てをる。イギリス國敎會とカトリクとの類似で、色々の問題があり、又滑稽の間違ひの起つた事もあるが、それ等は別にする。それから說敎、平凡らしい老人が出て平凡な調子で平凡の說敎をする。聖書を讀む事を勸め、聖書の効能を說くが、それも今日集める金が聖書會の寄附金であるので、何となく總てが只寄附金勸誘の說敎にきこえる。國敎派にはオ

クスフォード運動以來活氣はあるが、一體に人物が缺乏して、非國教派に對して遜色がある。ロンドンの司教は中々の人物ときいてゐるが、一般の思想にはどれだけの勢力があるか。メリーボーン邊の田舍寺一つで全體は判斷出來ぬが、それにしても、朝の說教と夕の說教との對照は實に面白かつた。

聖三位の寺から歸りにトッテンハムの通りを來ると、街上說教がある。救世軍ではないが、救世軍風の說教で、若いものゝ墮落を戒め、適切の教訓を熱心にしてをる。若いものに對する說教ではあるが、何人もその通俗の說教を眞面目にうけ、眞面目に考へる必要がある。自分にとつても好教訓と思つて車馬のさわがしい中に、熱心に說教をきいて居る中に、又雨がふり出した。宿の方に歩を向けて來ると今まできいて居た說教が濟んだか、軍歌の樣な歌がその方にきこえる。自分も總ての惡を征服して、凱歌を奏し得るのは何時來るか。

七月十三日。 原稿の燒失、大寺、偉人の墓。

朝から車軸の雨、半日はフェアバーンのイギリス教會に關する論文を讀んでくらした。

午後は先づ大使館に行つた。日本からこの方に宛てゝ來た手紙が溜まつて居た。その中にアジア學會の書記マクチア氏からの手紙がある。去年の秋、四阿含に關する研究の原稿を同氏に托してから、何の音沙汰もなかつたので、直にあけて見るとlost copyといふ言葉が第一に目につく。何事が起つたかと讀んで見ると、原稿を横濱の印刷所に托したが、その火災の時に原稿も一緒に燒けてしまつたとある。十年の辛勞も一朝の火に皆無になつてしまつた。材料は殘つて居ても、パリ文と漢文とを對照して一々異同を書きつけ、比較の表を作つたその結果は無常の紙と共になくなつた。昔は佛教の經

文が火中にあつて焼けなかつたといふ話しはあるが、經文の研究は火には耐えなかつたと見える。考へて見れば泣いても叫んでもおつつかぬ。日本に歸つたら元の材料を集めて前よりもよい結果を出す外ない。卒業の翌年頃から始め、ベルリンでは中阿含の一部分にかゝり、それから三十五年の夏このロンドンに居た時は、特に雜阿含のみを研究して、去年出發前に急いで結果を集めた研究が、火に焼けた報知を六年後再びロンドンに來て得る。一層昔のロンドンでくらした日を思ひ出す。此も忍耐と持久との力の試驗にならう。日本に歸つたら、一つ他の研究にかゝらうと思つて居たのを換へて、元の研究を尙精密にしやう、先の研究にまだ不十分な處があるといふ如來の警告と見れば、この不幸も歡んで受けるべきである。それにしても、人間のする仕事のはかなさをつく〳〵感ずる。

大使にも會つて大使館を辭して、エストミンスターにあるカトリ

クの大寺 Westminster Cathedral に行く。六年前には正面の扉も出來て居なかつたのが、大分工事も進んで、堂內處々に大理石の裝飾が出來て居る。それにしても、大體の胴骨のみ出來て、ビザンテンの大天井や柱は煉瓦で積み上げたのみで、ロマの古廢墟に入る心地がする。然し、ロマの廢墟は過去の紀念、この宏大な胴骨はイギリスに於けるカトリク敎會の多望な將來を語る。カトリクがイギリスから逐ひ出されて四百年、その回復の端緒が開けてから六十年。この六十年の間に數百萬の信徒を得て、この大寺を建築したばかりでなく、宗敎の信仰、敎會の儀式、一國の美術の上でカトリク敎會がイギリスに勢力を及ぼしたことは幾何か。この大寺はその勝利のしるしで、又その出來上らない大堂の胴骨は敎會の未來を現はしてをる。

大伽藍を出て今度はエストミンスターアベー(Westminster Abbey)即ち國敎の大寺に行つた。千百年の古跡、六百年の古建築、この一宇、

の堂にイギリスの歴史と國敎の隆替とが現はれて、その煤びた石の壁、定かならぬ石の像の一つ〳〵皆人間の生死、世間の變遷を眺めてこゝに立つ。疊つた空合に堂の中は一層うす暗く、垂直に並んだ柱や森の木々の枝に似た高い穹窿の天井が、その灰色に一層の森嚴を覺えしめる。壁の間、柱の間に並ぶ墓碑の石像は何れもこの國の歴史に大きな仕事をした人の遺骸の安らふ所。その仕事は國民の歴史を飾つて後代に景慕せられても、その魂はどこかに去つて、その五蘊は冷い棺の中に納められて、血のない石像に昔の面影を止める。こゝに埋められた人の中には、偉人もあらうが、又策略や爭鬪に一生を失敗に終つた人もある。親と子とが棺を並べてゐるのもあるが、敵と敵とが同じ壁の前に並んで居るのもある。軍人や政治家の墓には色々の歎きや惡みの遺骸もあるが、歩を轉じて南の堂にある「詩人の一角」Poets' Corner に行くと、こゝには各々天來の妙音に感じて、その

の微妙音を人間に傳へた人の跡。爭ひの代りに和樂、惡みの代りに調和の人々。シェキスピアの傍にはバーンスやコレリッジ、テニソンと並んでロングフェローも居る。音樂者のヘンデルも居れば、役者のガリクも一代の人望の跡をこゝに殘す。見上げる石像、足の下に踏む棺蓋、何れも人の心の不思議を發いた人でなくば、天然の美を詠じた人。椅子にかけて冷かな石の壁に身をよせると、此等の人々の靈が身にしみる樣にある。夜、靜かな時、月の光りがおぼろに寺の窓から射す時、此等の棺蓋が開いて、その中から此等の人々が現はれて、寂靜の堂内に各々その詩を朗吟でもする事があつたら、嘸面白からうと思へる。いつまでも坐り込んで居たいが、此頃は博覽會の見物が多くて、人がどや〳〵往來する。暫くして、詩人の一角を去つて、今度は元の僧院の廻廊に行く。此處は靜かで、煤びた窓や柱に圍まれた青草の芝原に、昔の僧院の面影が殘つて居る。その間に石にかけて、べ、

チデクト派の修道僧がテームスの河岸にさゝやかな僧房を營んで遁世修行をした昔から、今の大寺になり、貴き僧達の住居が出來、この寺の中に歴代の即位式を行ふ樣になつた今日までの成行きを考へると、この一字の中に七八百年のキリスト敎史が殘つて居る。昔は郊外の閑居であつたこの廻廊にも、外側の車馬の音に萬國の人々の往來の音がきこえる樣になつた變遷には、イギリスの國の進運、又世界の歴史の變遷をきく事が出來る。

堂を出て、議事堂の塔上にユニオン、ジャクの旗の飜つて居るのを見、一方は今見た寺の古風と、一方はこの議事堂を源泉にして出るイギリスの政治の進取との對照を思ふ。

七月十四日。 博物館、公園、博覽會。

同宿の長嶺君と一緒に南ケンシントンに博物館を見に行つた。

始めに博物の陳列館に這入ると、眞中に昆蟲の「まね」mimieryの箱が目につく。木の葉の樣な羽の蝶が木の枝に止まつて、全で木の葉の樣に見えるのやら、苔の間に居る蜘蛛が苔と見分けのつかぬなど、上手に陳列してある。それからhumming birdといふ小鳥の羽翼が虹の樣に、見る方をかへるに從つて、色々の色に光るのが二三十の箱にある。子供等がそれ等を見てあるいて、手帳に何かつけて居る。坊や等をつれて來たら、嘸喜ぶであらうと思ふた。哺乳動物も澤山あるが、一々地圖でその分布を示してある。大きなからだの動物で、案外小さな區域のみに住んで居るのもあれば、鼠の小さなので殆ど世界中に擴がつて居るのもある。人間の顏を人種で分けて列べてある中に、日本人のも十人ばかりあるが、その中に日本一の立派な男の芝翫の寫眞の側に、田舍娘の醜い女の寫眞があつて、日本人の兩極端を示したかと笑つた。その外植物の標本を見ると今までにあちらこちら、

で摘んでなじみの花も多い。こゝに來て一々その俗名や學名をかきつけたらよからうと思ふが、その時間もない。

博物の方を出て美術館を見る。今までに見たところではあるが、木彫、寄せ石、金細工、螺鈿、水畫、油畫あらゆる美術品の澤山にあるには驚かれる。その中にある明珍のかぶとは、元は或る大名の家から出て五兩に賣つたものを、この博物館は二千圓に買つたのである。が今ではどうしても何萬圓かの品物である。その外イタリアの美術でこういふ工合にして、今こゝに集まつて居るものも多からうと思へる。博物館の中で中食して、最後に名高いラファエルの下畫き畫Cartoonを見た。ラファエルの他の畫の樣に色が派手やかでなく、筆つきの剛氣な處が見えて、何となくキンチの面影がある。織物の下畫きであるから、織物に適する樣にした加減もあらうが、一つ立派な作を見せやうといふ野心がなく、何となく眞心その儘に畫き出した樣

で奥ゆかしい。日本の畫家で西洋風を參考しやうといふ人は、アンジェリコの壁畫やこのカルトンなどに筆つき色案配を學ぶがよからう。光線の濃淡に富んだ作を參考するのは却て害にならう。

美術館から印度館に行つて長嶺君に印度の事を説明する。印度に行く前にこの陳列を見た時には、此からこういふ山水を見、こういふ人民の間に行くのだと思つて、新奇のものを求める心で見たが、印度に住んでから五年目に、再びこの陳列を見れば總てが追懐の種で、又違つた面白味を覺える。

ケンシントンの公園で、木の蔭に休んで、草原の羊や池の邊に遊んで居る子供を見ると、六百萬の人間が群集してをるロンドンの眞中に、こういふ田舍の景色があるかと驚かれる。イギリスの田舍はどこに行つても森の木々の間に綠草の牧場があつて、森には鳥、牧場には牛羊、その間を自山に通行し得るから、子供等も小な時から鳥を可

愛がり、家畜に親む樣になる。乳母車に乘つて居る赤ん坊でも手を延ばして、羊の頭を撫でゝやる、小な女の兒も草をとつて牛に食はせてやる。イギリスで出來る子供の本には「鳥とその巢」とか「お内の牧場の友達」などいふ本が多く、子供も鳥の巢を壞はしたり、鳥の子をとつたりしない。天然を愛し動物に親しむのは、人間の心情の和らかになる基である。日本の子供にはこの樂みがないから、鳥の巢を壞し、卵をとり、蟬をいぢめる。日本の子供も何とかして天然に親しむ樣に教育しないと、小さな時から動物をいぢめるくせがつき、殺伐になつて、運動會には豚追ひの野蠻を演じ、犬の子を殺しなどして、それが大きくなつて人間を虐待する樣になる。田舍の學校だけでもせめて學校園の外に學校の牧場を設け、都會では動物園でおとなしい動物を放し飼ひにする樣の事をしてほしい。

それから、辻馬車の屋根に乘つて、ロンドンの西、シェパードブシの博

覽會に行つた。これはイギリスとフランスとの親交のしるし兼祝ひに二國聯合で開いたもの。入口の賣店の中に、兩國の物產を賣つて居るが、その中に「園の町」Garden Cities の陳列がある。イギリスではこの五、六十年以來田園生活の主張や實行が多くなつて、ロンドンでも、近郊には都會でなく、全で花園の町が出來て居る。その組織を一層經濟的にし、家の建築や庭の作り方に趣味を加へ、衛生や集會の都合を計つて、この園の町の組合が出來た。日本でも都會の膨脹が段々問題になり、道德や衛生の點で注意すべき事が多くなるが、「園の町」はこの問題の解釋に參考すべき事、又模倣すべき事と思ふ。

科學の部では電氣機械などの事は分からぬが、氣象觀測に雲の色の面白い寫眞がある。地圖の陳列も多い、その中にゴルドン大將や探檢家スタンレーの自筆の見取り圖があつて、その人々の苦勞の跡を偲ばしめる。イギリスの學問は單に机の上でしたものでな

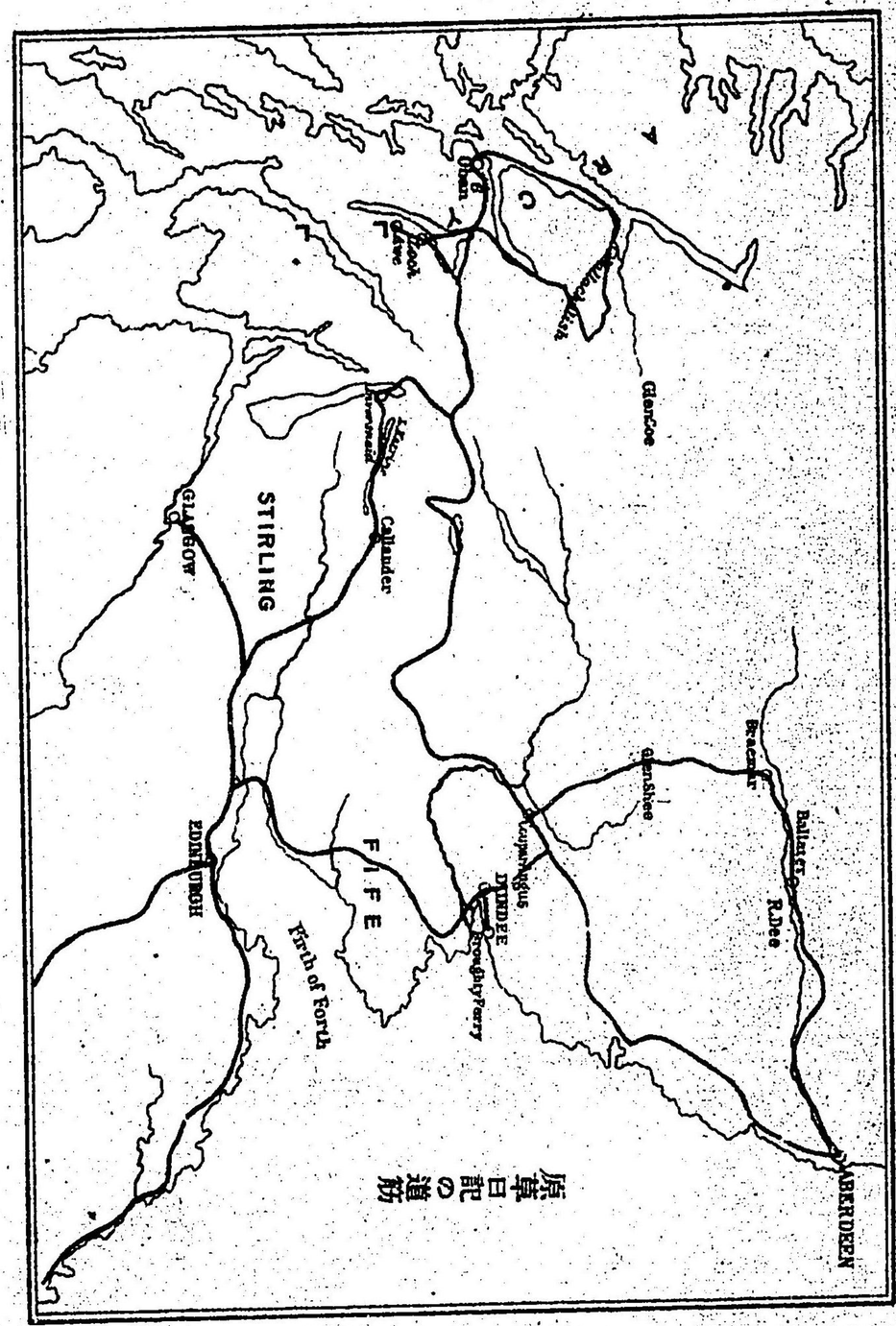
い。

美術の部、婦人の細工などもざつと通り過ぎて、中庭で茶を飲む。陳列館の建築や中庭の花園、派手やかでなく、高尚でイギリスの特色を表はす。フリプフラプといふ長い棒の先に乘つて空中に上ると、會場全體からロンドンが目の下。アイルランド村には、古の十字架の模造や、聖パトリク(アイルランドの守護神)の墓の外に、アイルランドの娘が白い着物の上に綠と紅との飾りの田舍風をして、布織や、木彫など國產を賣つて居る。アウストラリア館には、羊毛、金鑛、果物などその豐富な天產物が山の如く積んである。夜になつて、電氣燈やガス燈の外に、花園には、日本の紅白の提燈。八年前のパリ博覽會の樣の大きな事はないが、一つの不夜城で、あたりのアラビア風建築と共に龍宮城の如くに見える。

外篇第三

原ぐさ日記

荒岩の山を色どる原草を
さかせし露は天のむらさき、



原亨日記の道筋

Admiring Nature in her wildest grace,
These northern scenes with weary feet I trace;
O'er many a winding dale and painful steep,
The abodes of covey'd grouse and timid sheep,
My savage journey, curious, I persue,

* * * *

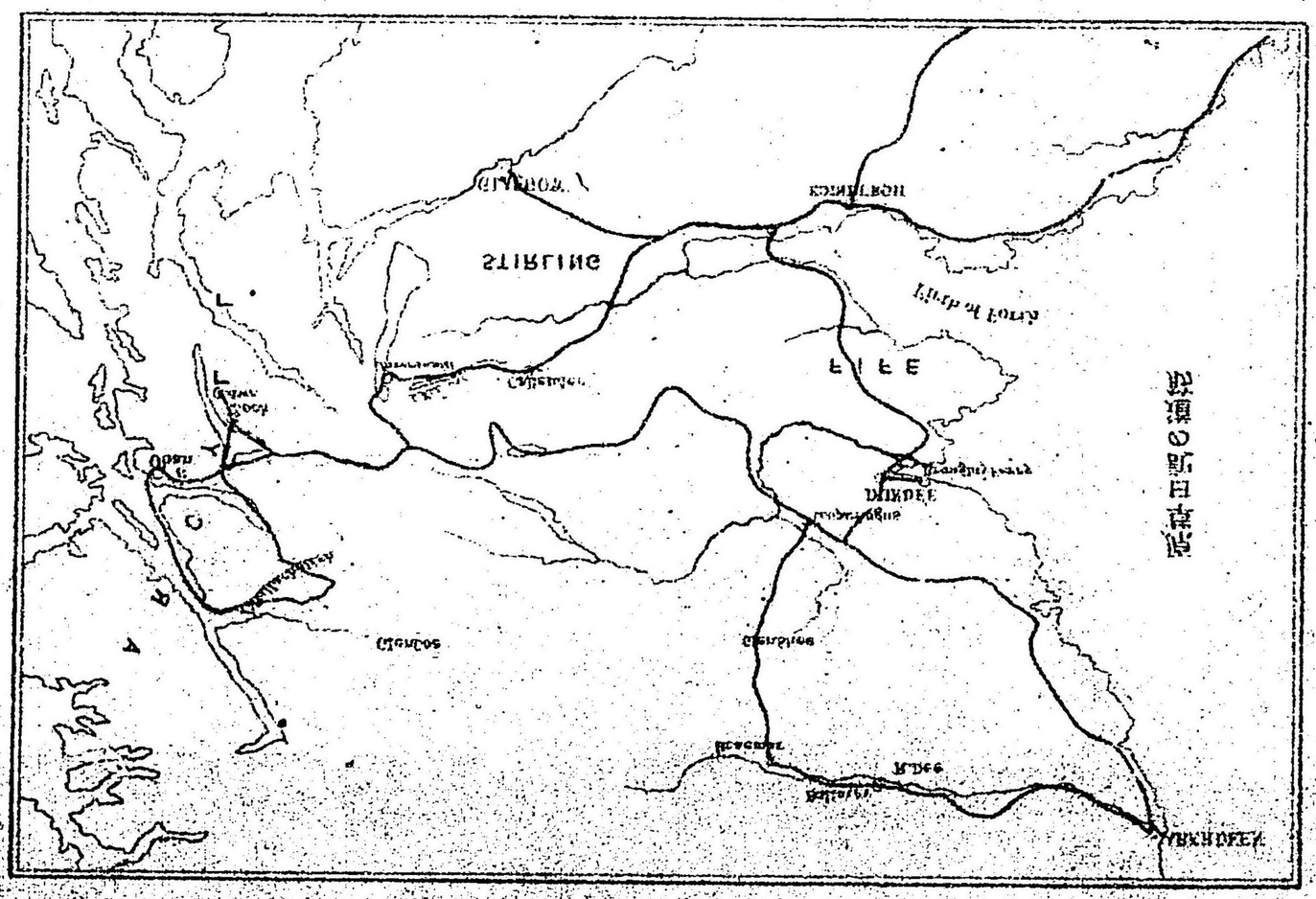
Poetic ardours in my bosom swell,
Lone wandering by the hermit's mossy-cell:
The sweeping theatre of hanging woods!
The incessant roar of headlong tumbling floods.

* * * *

Here Poesy might wake her Heaven-taught lyre,
And look through Nature with creative fire;
Here, to the wrongs of Fate half-reconciled,
Misfortune's lightn'd steps might wander wild;
And Disappointment in these lonely bounds,
Find balm to soothe her bitter, rankling wounds;
Here heart-struck Grief might heavenward stretch her scan,
And injured Worth forget and pardon man.

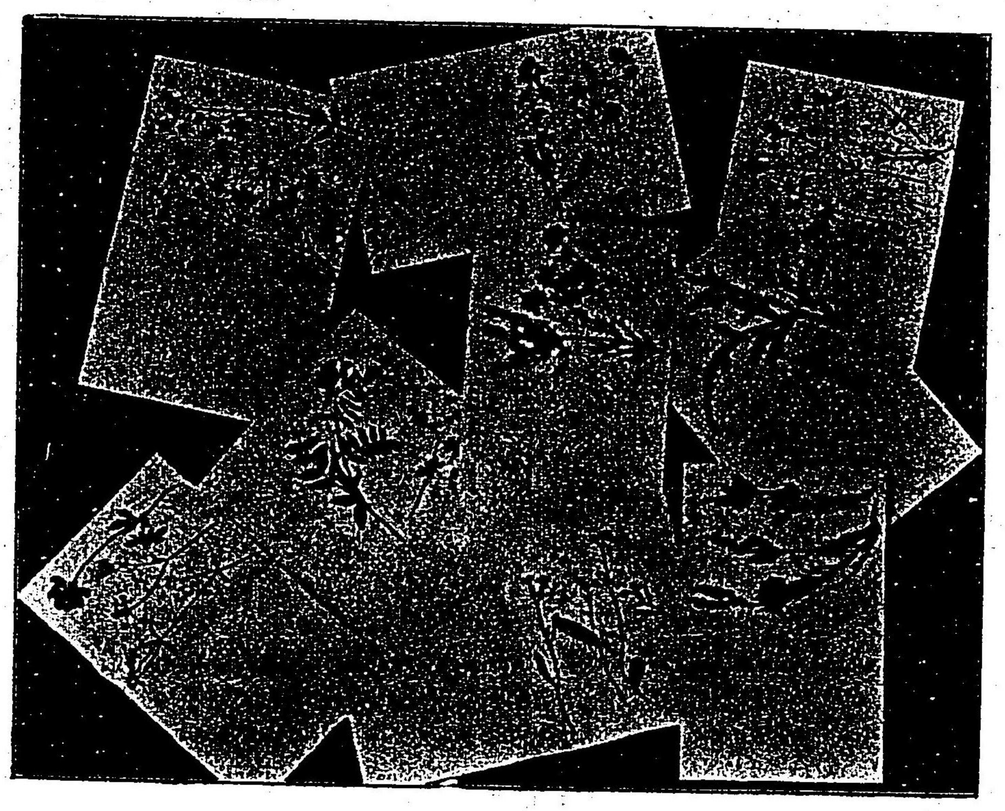
* * * *

——Burns.



第一図 日本語

ベガアムサンドの開花



四十一年八月四日。 再會、岩山に原草、湖上の美人。

朝おきて顔を洗つて居る時、戸をたゝく人がある、あけて見るとE.P.B.「昨夜この宿に來て尋ねて見たが、まだ着かないときいて今朝まで待つて居た」との事で、六年以來の再會を喜び、それから共に朝飯を食べに下りる。昔の病人は殆ど全く健康になつて、「大抵始終スコットランドの山地でくらす。今はダンデーの北の田舍に伯父夫婦と共に夏をくらして居るが、一つ共に山地を周遊しやう」と元氣は中々よい。朝飯を終つた頃に雨が降り出した。山地に行くに雨ではこまると思つたが、E.P.B.は「何、天氣などかまはずにどし〳〵行かう、スコットランドの雨風を山中の湖上に眺めるも亦一興だらう」といふ。考へて見れば、天氣の事を一々氣にかけるは愚で、一年の中に雨もあれば風も多い。前以て雨が降らうか風が吹かうかと案じては、身動き、

は出來まい。

共にプリンセス町のステーションから汽車でエデンバラーを去つたのは十一時。雨に濡れた森の木、畑の麥や、雪にも似たポテトーの花など、スコットランドにも平野の眺めはある。スターリングの古城を丘の上に見て、汽車は段々山地に入る。車中に他に一人の老人が居て、色々この邊の歴史上の故蹟の話をしてくれる。女王マリアの宮の跡や、ブルースの戰場、ドブラーヌの古寺など、見るに從ひ過ぐる度に敎へてくれる。その人にも別れ、テース(Teith)の河に沿ひ、森影に別莊の多い地をすぎて、カランダ(Callander)に着いたのは一時半。それからは馬車で、山の麓、湖水の岸を行く。ライムやアシの並木道に沿ふて花園に圍まれた別莊の家々や、柳の樣な木が淋しさうに枝をたれるエンナカ(Vennachar)湖の岸や、何れも山地に入つた心地に靜かな感を與へる。雨は止むだが、空は曇つて風は寒く、まるで秋の

景色。

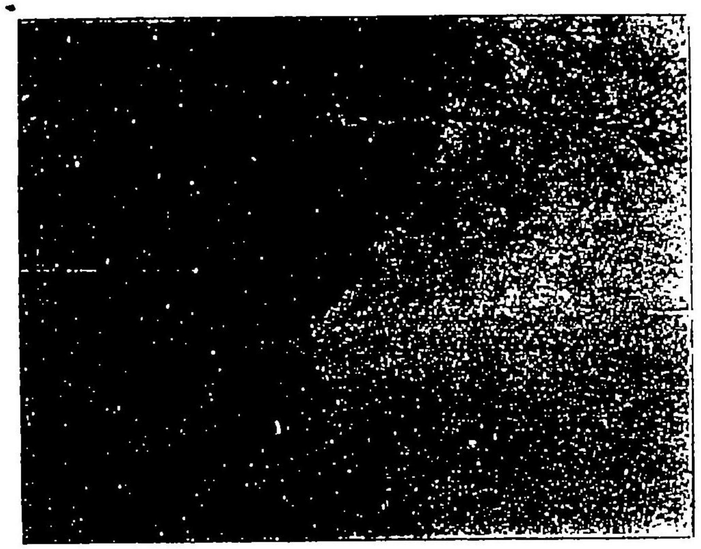
トルコ人橋といふのを越えると、道はアカリー湖(Loch Achary)の岸に沿ふて、山に圍まれた小な湖上の景が何となく物淋い。その湖岸の中頃にトロサクのホテルがある。そこで中食して後、背後の山に上る。山は一面のしだ草原、下には深碧の湖水を見下し、その先の山を越えて名高いベンベヌ(Ben Venue)の峰が聳える。この山を見ては、どうしてもスコットの「湖上の美人」を思ひ出す。十數年前に學校で讀んで名にのみ見た山を眼の前に見て昔を思ひ出す。トロサックを出て湖岸から山道にかゝる。兩方の山は迫り、路傍の木の茂み、岩の崖、昔は山賊、野武士の横行した跡が偲ばれる。御者は昔を語つて「この邊の山には岩窟も多く、この森の間をくゞつて山賊が出沒したものです」と、如何にも見た樣に話す。そうして後に「今の世にはそんな事はありません」と旅客に安心させる。林のアシの木や細かな葉

の樺が枝を垂れて生ひ茂る樣は、スコットの詩に「泣くアシに樺」Weeping ashes and birches とある通りで、その銀色の幹が岩根から生ひ出て、木々の間に高い山の見える景を見ては、この國の名工マクファーターの畫に一層の面白味を與へる。その名畫の「三人の姉妹」Three Sisters は即ちこの谷間にある三本の樺の木をとつたのだといふ。

峠を下り、原草即ちヒザー(heather)の紫の花が咲き亂れる岩の間を過ぎると、カトリンの湖水(Loch Katrine)が斷崖に圍まれて湛える。馬車を出て船を待つ間に湖岸を散歩する。突き出た岩角の木々、その脚を洗ふ湖水、共に疊つた空に黑綠色をして、一幅の墨畫を作る。イタリアの風景は油畫の樣に色彩が豐富で美しいが、スコットランドの山水は只一つの沈んだ色に奥深く見える。二人でヒザーの草原に坐り込んで湖山の眺めを恣にし、E. P. B. は處々「湖上の美人」を讀む。そこへ山地の風裝をして黑赤青の袴を着けた男が二人來て山地の

ロマンの谷

(五三八頁參照)



ベンヤ湖上

(五三九頁參照)

笛bag pipeを吹く。狩りに吹く笛だけあつて鹿もその音をきいて躍り出すかと思へる。單調ながら抑揚の音は湖水を亘り山に響いてスコットの詩にあるロデリッキの出て來る處そのまゝである。

Thick beat the rapid notes, as when
The mustering hundreds shake the glen,

といひ

Then prelude light, of silverly tone,
Expressed their merry marching on,
Ere peal of closing battle rose,

といひ、その音樂が悲しい樣で快濶な處もあり、叫び聲の樣にもあれば追分の樣な調もある。その鳴り止んだ時には

The war-pipes ceased; but lake and hill
Were busy with their echoes still;

といふ句の「靜かな反響」といふのが特に面白く感ぜられた。スコットの詩の中には實にこの笛の響きがあるといつてよい。

時も來て、Sir Walter Scott と名のついた小な奇麗な舟は岸を離れて、岩角の間を廣い湖面に出る。「湖上の美人」の主人公エレンが居たといふエレン島(Ellen's Isle)には木が茂つてその影を水に垂れ、左にはスコットが銀砂の汀(silver strand)と呼んでから、固有名詞になつた銀砂汀の白砂が連る。なだらかに湖上に麓を垂れる山の峰は突出した岩山で、北にあるのがアンの峰(Ben An)南にはベヌの峰(Ben Venue)。その二つの峰つゞきに圍まれた湖水は西風に波立つて曇り勝ちの秋景色。この黑綠の間に紅葉の紅があつたら嘸美しからうと思へる。一時間ばかりで舟は西の岸のストロナクラヘル(Stronachlacher)に着く。小なホテルの白い壁がロドデンドロン(五月花の類)に圍まれて夏の住家にはよささうな處。そこから又馬車で山道を上る。

一本の立木もなく、岩の間の草原と處々の沼池には地に匂ふ樣な草のみ茂つて、その間にカンナといふ白綿の草が淋しさうに風に吹かれてなびく。山を上るに從て湖水は山と山との間に沈み、夕日が少し雲間から漏れて淋しい光りにベヌの峰を照らす。スコットが山を下つて湖水の眺めを形容した句は丁度この景色。

In all her length far winding lay,
With promontory, creek and bay,
Loch Katrine lay beneath him roll'd,

その眺めにも別れて車は峠の下り道、林の間を馳せて、程なくロモンドの湖水(Loch Lomond)が山の下、木立の間に見える。湖岸のインヴースチード(Inversnaid)のホテルに着いて、崖の下の湖水を見下す。この湖水の眺めはカトリンの樣に開けずに、險阻な山に圍まれて深く物凄く、夕暮の霧があたりの山々をこめ初めて、山家の一つ家が一

屑物淋しい。

夕食の後には火を焚いた爐の邊に皆が集まつて、同宿の人々各その旅行の話しをしたり、あすの行程の相談などして、一つの爐のぐるりは一家族の如くに賑ふ。

寢室に來て靜かにスコットを讀む。湖邊の山家の夜の靜けさ、梢吹く風もなければ、浪の音ときこえぬ。只遠くに瀧の音がするのみ。さべルヒの湖邊を去つて以來これだけの寂靜は今日が始めて。カトリン湖の邊にマルコルムの武士姿もなく、エレンの島には乙女も見えなかつたが、その邊りでスコットランド山地の笛もきいた、アランベンの樣な老人も舟に居たなど考へつゝ寢につく。

八月五日。 オーの湖、湖上の家庭。

朝おきて、二人で湖邊を散歩する。朝霧は尙西の峰に迷ふて居る

が、東の空には雲間から日光が少しさす。崖を傳つてスコットの話しにあるロブロイの岩窟といふのに行つて見た。岩窟は深いとの事であるが、それよりも湖畔の山の景色、崖の上からの湖水の眺め、山も水も同じ蒼色の天地の方が興味が多い。それから宿に近い瀧を見て後朝飯の食卓につく。山間の空氣に加へて食前の散歩をして、これ程美味の朝飯を食べるのはいつからか殆ど覺えない。

十時半に船でインヴースチードを出て、ロモンドの湖水を北に渡る。同宿であつて昔ケンブリジで菊池男爵と同窓であつたといふバーカーといふ人と、その妹と同行四人になつて、話しの間に湖水の北端アルドルイ(Ardlui)に着いた。汽車を待ち合はせの間ホテルの緣側で紅白の花の咲き亂れた間に日光にあたつて、四人で茶を飲む、はがきをかく。こゝも靜かな住み心地のよさそうなホテル。イギリス人の足跡の屆く所にはどこの山中にもこの樣な樂天地を作り

出す。

汽車でフロック(Fulloch)の谷を北に向ひ、ロモンドの湖水に別れを告げると、後は山の原の廣漠な眺め。山と山との間をすぎて一時間餘で又別の湖水が見える。その島には古城の廢墟が見え、汽車は湖岸を周つてオーの湖水(Loch Awe)の北岸に着く。そこの山の上には城廓風のホテルが聳え、四方の山は松柏類の林で一面の碧世界。こゝでバーカー二人に別れ、汽船でオーの湖を南に向ふ。小な島の岩根に樺の枝の垂れたのもあれば島の上の草原に牛の草飼ふも見える。四方の山の峨々と聳えるに對してこれ等の島々が特に庭の小島の如く、程なく船は「日影の港」Port Sonnachan に着く。こゝのホテルも湖岸に芝草の庭、ロドデンドロンの叢に圍まれてゆかしい作り。

食事の後馬車を駈つて湖岸を南に、ホテルから二里、E.P.B.の友人で牧師のトループ(Rev. Troupe)といふ人が夏の間來て居る「湖」水の眞

中」Ballimaenach の家に行く。上り下りの路もなだらかに木々の茂みの間を馳せ、その門に着き、羊の放し飼ひにしてある牧場をすぎて行く。十二三の男の子が飛び出して來て「B君待つて居ましたよ」といつて手を握り、それから内に行つて、父親と一緒に出て來た。トループ氏は大きな男で快濶な人。「初めて會つたが互に名は知つて居た、よく來てくれた」といつて、芝草の上に並んだ椅子にかけて山や羊の話し、湖水の釣りの事、話しは全く浮世を離れる。その中に夫人も出てくる、二人の娘と二男でエデンバラーの貧民救濟に從事してをる人も來る。暫くして友人と二人で釣りに行つて居た三男のボートが岸に着いた、皆で總立になつて叫ぶ、口笛を吹く。日光のきら〳〵した漣の間に舟から上つて來る二人は遠くから大きな聲で「鮭がとれた」といつて牧場を馳せ上つて來る。今年は漁の不作で一向に鮭もとれなかつたのに、今日は大きなのがとれたといつて、皆で大喜び。

末の男の子は飛び上つて喜ぶ。これで一家皆揃つて十人ばかりの一團が芝草の上で手製の菓子で茶を飲む。「この家は十里の長さの湖水の眞中で、南の方は五里先きの百姓家と、北は二里先きのホテルとが隣家である。菓子でも何でも皆内で作る、お客があつてパンのなくなる事もある。然し遠慮せずに食つてくれ。娘二人で手製の菓子ならいくらでも作る」。「君は茶の濃いのが好きなら、一つ特別の濃いのを二つ急須に入れさせやう」など、父親が快談すれば、母親は「この長女は髪が黒くて日本人に似て居ますが、日本に行つたら嫁入りが出來ましやうか」など冗談をいふ。子供が内から一つ寫眞を持ち出して來て「此は海軍に居る一番の兄さん」だといつて示す。山湖の離れ家にこの樣な家庭の生活のあるのを見るも愉快であるが、又異郷でこの樣な家庭の間に這入つて、日あたりの芝草で茶を飲むも一層の愉快である。

茶が濟んでから、一つボートで湖水に出て瀧を見に行かうといふ事で、トルプ氏は釣を垂れる、夫人とE. P. B. とは見物、二男と自分とは櫂をこぐ。垂れた釣針に魚が一度はかゝつたが、とれずに終つて、一里ばかり行つて上陸。外の男の子等は自轉車で來て、皆で一緒に丘を上る。丘の上は、しだの處々にある外は細美な芝草のみで、その美しい綠に夕日があたつて一層萠黃になり、湖水を越えて向ひの丘には草原の綠と岩角の影との對照で著しい濃淡の畫を作り出す。北には岩山の數々の上にクルアカン (Ben Cruachan) の高峰が碧空に聳えて、湖山のやさしい景色に雄大を加へる。瀧は岩間の窪にかゝつて高さ五六十尺、あたりは綠草の前栽の樣な丘の中にその處だけは深山の趣を呈する。瀧の邊に坐り込んで入日の景を眺める。あたりの世界は瀧の外に聲もなく、湖水の面には日の光もなくなつて、夕風が段々冷かに吹く。山を下りて又元のボート。漕ぎ出す頃には

クルアカンの峰に夕日が殘つて、西の山々には夕霧が處々現はれる。八時すぎにトループ氏の家に歸つて、一家揃つて夕食。話しはこの邊の大地主の興廢から勞働問題に移つて、エデンバラの貧民窟に傳道してをる次男は色々その經驗を話ししてくれる。賑かに夕食を終つたのは九時すぎ。それでも此國の夏の夕あかりはいつまでも薄すあかるく、皆で湖水の汀まで送つてくれるに別れて、今度はトループ氏と三男とが櫂をとつてボートを漕ぎ出す。湖水の表は灰色に光つて四方の山々も黑く影の如くに見え、空には薄す光りが充ちて、處々に雲が浮び霧がかゝる。山水總て灰色の中に包まれ、遠近もなければ凸凹もなく、天地は只一面の墨畫になる。この樣な夕あかりの微光の山川は日本では見られぬ。狩野派の山水畫でも此よりも明暗がある。湖水の岸、水の光りが岩や森に盡きる處には、見亘す限り燈火もなければ人聲もなく、死んだ樣な湖面を漕ぐ舟の水を切

る跡の外には動くものもない寂靜の世界。禪の畫家詩人は默想三昧の中にこの樣な寂天地を見たであらうが、こゝには天地山水そのものが禪定に入つたかと思はれる。

歸り路が餘り暗くならない中にといつて、岩角に舟を着けて貰つて上陸し、皆に別れて二人で湖岸の路、並木の間を行く。十時に近い夕方にも尙光りは薄くてらして木々の影が物凄い。顧みると後の山に月が出て、聲も色もない天地に二人行く路をてらす。一里ばかりもあるいてホテルの窓にうすあかりを遙に見た時は、始めて人間世界に歸つた心地がした。

ホテルに歸つたのは十一時近く、ビールを飲んであすの行程を定め、各寢室に入つた。窓には月の光りが物淋しく照り込んで、山も湖水も皆靜かに眠つてをる。

八月六日。

オー湖のあさぼらけ、コー谷の山登り、オバン海岸の夕暮。

朝早くに起き出る。今日も空は霽れて日が已に山々を照らしてをる。茶をすませて小舟で湖水を西の對岸に渡る。同じ靜かな山水ながら日の光りで何となく生氣がある。夏の朝の光り、柔かな山風、眠りからさめて稍笑む如き山水、總てスコットの詩中の景。

The Summer dawn's reflected hue
To purple changed Loch Katrine blue;
Mildly and soft the western breeze
Just kissed the lake, just stirred the trees,
And the pleased lake, like maiden coy,
Trembled but dimpled not for joy;
The mountain shadows on her breast

Were neither broken nor at rest:
In bright uncertainty they lie,
Like future joys to Fancy's eye.

特に最後の句の「空想の眼にうつる來ん喜び、その中に山も水も横はる」といふのは、全くこの山水のあけぼのゝ趣を表はして遺憾ない。

對岸にはゆふべ命じておいた馬車が待つて居る。それに乘つて、馬は勢よく山道を上る。御者の犬二疋は驅けてついてくる。牧場には牛や羊が日にあたつて青草の世界に遊び、可愛い目つきをして走せて行く車をぢろりと見る。段々に山を上り、道は木もない荒野原に出て、麓の湖水は深く山の間に沈み、向ひの岸の木立、丘の青草が靜かに水にうつり、朝霧は尙處々にうすくさ迷ふ。

森の木立のふかみどり、　淺色にほふ草の原、
さぎり隔ててうつろふる、　ロコの淡海の水鏡。

上るに從つて湖水は見えなくなり、浪の樣な丘の草原のみ。

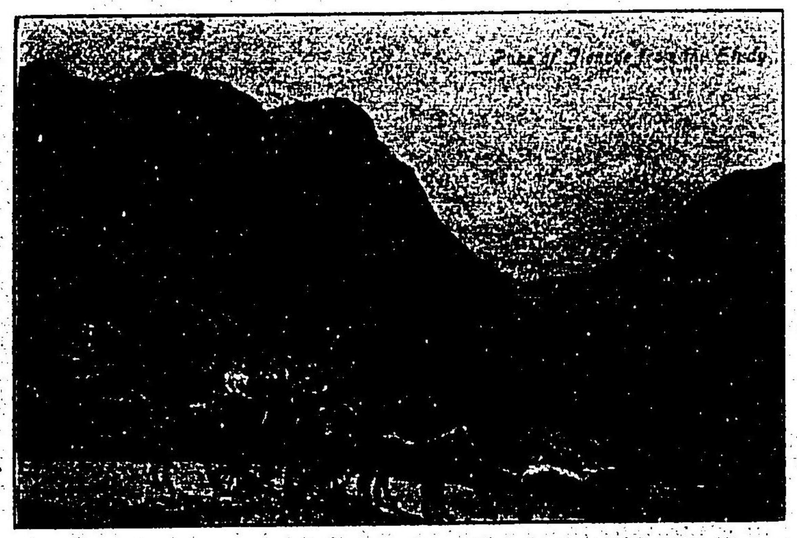
空すみて綠も淸き山の邊に、
岩かけりつゝ羊等のなく。

下り道には木立も多くなり、谷にはナントの谷川が流れる。谷に沿ひ木々の間を馳せ下り、朝風が寒く、犬は草の露にぬれてついてくる。山を下つてテーヌイルト(Taynuilt)の村に着いたのは八時、舟の出るまでには二時間半もある。村の宿で朝飯をたべて後、日光の鮮かな田舍道に花を摘む。村から半里エテーヴの入江(Loch Etive)の渡頭に船を待つ。村の者に巡査、郵便配達に船頭、皆スコッチ風の英語で高聲に話しては笑ひ興ずる。入江の先に汽船の煙が見え、岬を廻はつて入江の眞中にとまる。渡舟で汽船まで渡つて十時半にテーヌイルトを去り、船は入江の水を切り山と山との間を北に上る。クルアカンの峰には尙霧がゝつて居るが、北の山々には日が鮮かに

照つて春めいた景色。岸邊に柳が垂れ、山邊の百姓家に桃の花でもあれば、全く日本の春景色であるが、山には木もなく岸には村もなく、見渡す限り、水を圍む岩山の空に聳ゆるばかり。

入江の北の端で船を出たのは正午。赤色に塗つた大きな乘合馬車に赤色のコートを着た御者がたくましい四疋の馬の足をそろへて待つてをる。旅客十數人皆このおつ開いた馬車に乘る。御者と車掌とはスコットランドの古語のガリクで話してをる、ガリク語をきくのは此が始めて。車は動き出す。入江の水は段々遠かつて岩山の間の道を段々上る。岩角のヒザーの花は日に匂ひ、綿草の白い穗がそよ吹く風になびき、此も日にてらされて一層白く見える。十里の山道に飲食の店もないから、用意して來た辨當を出して、茶も水もなしに車の上で午食をする。日の光りは益す强く、高原の山道に始めて少しばかり夏かと思へる暑さを覺えた。

山を上りつめると一面の高原。沼地に草の茂つた廣漠の中に木立の一つ二つあるのも却て廣漠の感を增す。車は馬をかへ、路を西に轉じて、名高いコーの谷(Glen Coe)の道を下りる。兩側の岩山は削つた樣にそば立ち、その間には大小の岩窟が見える。その大きなのをオシアンの岩窟といつて、この國の昔話しの勇者が居た所だといふ。峰の影、岩の間には殘んの雪も見え、見上げる限り岩ばかり。「女王のながめ」(Queen's View)といつて、ヴィクトリア女王が止まつて眺めを賞せられたといふ處で、後には漠々の高原を見、前は峨々たる岩山の兩側から麓を垂れた間の谷間を遠く見わたす。雄大、廣漠、荒寥、この樣な景に接したのは殆ど始めて。その山々の間、谷に沿ふて下りる。兩方の山から落ち水が岩塊を落としたなだれの跡がいくつもあり、その落ちて來た先を見上げると、切りつけた樣な岩山の切れ目が峰の頂から直下する。



コーの谷、女王の眺め

(五五二頁參照)

スコットランドの山地、牧羊

(五五九頁參照)

この樣な dreary な dismal な wild な谷にも人の住むだ跡はあり、處々羊の番小屋の外に、昔の住家の石壁が殘つて居る。その一つで僅に石壁の跡があり、四五本の木立のある處はマクドナルド一族の居た處で、名高い殺戮の跡だといふ。總てこの邊の山地には昔は各その地方の豪族が割據して、その中には大名の樣なのもあれば野武士もあり、常に爭ひ戰つた。スコットの物語りなどは、その間の生活に面白く艶をつけたものである。マクドナルド一族はこのコーの谷に據つた豪族で、前からリオン谷 (Glen Lyon) の豪族カンベル一家と相爭つた。十七世紀の始めにスコットランド王ジェームス一世がイングランドの王になつて兩國合併した後、山地の豪族は名はイングランドの王に服して居たが、その實は半獨立であつた。そこへ十七世紀の末にスチュアート家の王統は絶えて、オレンジ家が兩國を支配する樣になつてからは豪族の中でそれに反抗するものも多かつた。然しそ

れも段々王家に服從したが、マクドナルドのみはいつまでも反抗をつゞけた。そこでオレンジ王家は今までの豪族の爭ひを利用して、カンベル一家を指嗾し、このマクドナルド一族を一夜に殺戮せしめた。この谷の淋しい景色に合はせてその殺戮の跡に、その話しをきけば一層物凄い感がある。今は平和の谷、羊がのどかに草を食ひ日にてらされる處にも、曾ては恐ろしい悲劇も演ぜられたのである。

十里の山道を日に照らされて一滴の水も飲まず、山を下りて始めての村に來て一杯のビールを飲んだ時は蘇生の思ひがした。それからは村もある、花園も見える。道は平坦になつて、程なくバラクリシ(Ballachulish)の村のスレート切り出し場に來て海岸に出た。この海はレヱンの入江(Loch Leyen)といつて、細い入江の兩側にはやさしい丘が連り、その林の木々の間には別莊やホテルが處々に見える。入江の水は退潮で急流をなして流れる、その間を上り下りする蒸汽

ヨットもある。バラクリシの渡り場に來て車を下り、程なく波止場に着き、船に乘つてオバン(Oban)に向ふ。正午から五時半まで山道を車で來て船に乘つた時は、全く別世界に出た氣がした。

船はリンチの入江(Loch Linnhe)を南に走つて、いづこも同じ樣な山の間の入江に、空は曇り初めて南風が強い。岩山の島々の間を過ぎて、オバンの港に還入つたのは七時。海岸の眺めを擅にした大西ホテルに着いて、立派な食堂で夕食。ドレスの紳士、盛裝の貴婦人もある。

食後海岸に出て、バーカーの兄妹に逢つて、四人で馬車を傭ひ海岸をドライヴする。日はくれたが、夕あかりは海山に殘つて西のな島々の上には鼠色の雲が綿帽子の樣に蔽ひかゝり、海の面は灰色に光る。只港に泊つて居るヨットの舷光がきら〳〵する外は、天地總て灰色の山水。岩山の木の茂み古城の廢墟、何れもこの灰色の中に黑ず

んで、世界の末期のうすあかりといふものがあればこの様であらうかと想へる。

バーカー二人に別れて宿に歸つたのは九時半。喫煙室でカフェーを飲みつゝ今日の遊びを話し、新聞を見て寢室に入る。窓からは港が見える。ヨットの燈火も物淋しく、月は雲にかくれて、面吹く風もうら悲しい。

八月七日。 スコットランドを西から東に。

ゆふべの曇りに引きかへて朝日の光りが派手やかに港内をてらす。九時半汽車でオバンを去る。或る銀行家が自分の紀念碑を建てる爲めに建て初めたといふロマのコロセオに似た石の壁が、山の上に立つのをオバンの別れに見て、途は又野山の間に入り海岸に出る。昨日のエチヴの入江に沿ひ、グルガカンの麓に出てオーの湖水

が奥深く山の間に湛える。その邊で乘り込んで來た老人もガリタ語を話してゐる。

オーの湖水の北邊から暫くは、一昨日通つた途。それから先は岩山にヒザーの花の咲き滿ちた高原。ヒザーといふのは「原の草」といふ意味。

原の花繁匂ふ岩角に、
遊ぶ羊の何ながむらん。

ドカルトの谷(Glen Dochart)の高みを下つて、行く手にアーンの湖(Loch Earn)が見える。汽車は湖水の岸を走つてビーチやライムの茂つた林の間から湖水の眺めもやさしい。このやさしい眺めの山水もやはり曾ては爭鬪の跡で、山地の豪族等が平原に下りて來て牛羊を盜み出す根據をこの湖水のぐるりの山に築いた、今もその石垣の跡が處々にあるといふ。

アーンの河に沿ふて下り、山は段々開けて平野が多くなる。パース(Perth)の町に出て平野の都會を見る。そこで急行車に乘りかへて東北に、終に海岸に出る。こゝの海岸も斷崖で、その上の野原の芝草原にはゴルフの遊びをしてをる人の姿が見える。

アバーデン(Aberdeen)に着いたのは六時半、一日でスコットランドを西から東に横ぎつた。食後市中を散歩して見ると、何れの家も白の花崗岩で築いて清潔此上ない。この町を花崗岩の町 The Granite City と呼ぶのは偶然でない事を覺える。

ホテルはステーションの近くで汽車の音がさわがしい。山地の靜かな處から大都會に出た氣がする。

八月八日。 大學、魚市場、デーの谷、山中の貴族村。

朝おきて先づ第一に大學の一部マリシャルコレッジ Marishall College

に行く。此も白石ばかりで新しいゴシックの建築。この大學出身のミチェルといふ人が大金を寄附し、その他カーネギーなども金を出して二百二十萬圓で新築したといふ。會堂や陳列室、圖書館などを見、教員室に入ると、書物でよく知つてをるベイン(A.Bain)の肖像もその壁にかゝつて居る。それから同じ大學の神學部になつて居るキングスコレッジ King's College を町はづれの靜かな處に見る。此處の建築は四五百年のもので、會堂には宗教改革以前のものも殘つて居る。休暇中であるから何れも家の見物だけにして、今度は馬車で海岸に出る。ドックにある船に石炭や荷物の上げ下ろしもいそがしさうに、今までの山地の生活とは全く別の世界　ドックに並んだ魚市場は、港に沿ふて三四百間もある鐵構造の長い石土間の建物で、漁船がその側に横づけになつて、とつて來た魚を上げる。小な魚は木の箱に奇麗に詰め、大きなのは土間に並べて、賣り手が一つ〳〵値をよ

み上げると、買手は競買ひで約束を整へ、買つたのには各その店の札を貼る。その魚の行列の立派さ、賣買のいそがしさ、どこの國でも魚市場は爽快なものである。然しこゝの魚市には毛脛を出しておしきりで來る漁舟の代りに汽船がつき、向ふはちまきの兄いの代はりに洋服のスコッチが居る。

十時半に汽車でアバーデンを去つて山地に向ふ。スコットランドの東の山地、グランピア山脈の東のはての小都會バラテル(Ballater)で汽車を下りる。それから先きは山の景色の保存のために鐵道の敷設を許さない。こゝでE.P.B.の友人ミラー氏一家の夏居を訪ふ。木立の茂つた山に對した田舍家で、庭には男の子が自轉車を直ほして居て、その子に話して居ると、兄二人も兩親も出て來て家に迎へ入れてくれた。晝飯前に一つ山に上らうといつてミラー夫婦と男の子一人と五人で河を渡つて向ひの山に上る。麓の方は樺の木の枝

を垂れた下にヒザーが一杯に咲く。そこから町の方、その先きの山山を眺めつゝ話しをしてゐると、末の女の子が伯母と二人でヒザーの花を一杯手にして走つて下りて來た。グランピアの山脈のはてが東の方に延びてその一つの峰にはヤグベスの最後を遂げた城の跡もあるといふ。西の方は山つゞき一面にヒザーの花に黑紫色をして、その上にロクナガル(Loch Nager)の高峰が碧く聳える。西の山地ほどに變化はないが、なだらかな山々のヒザー原の眺めは又一つの特色である。

ミラー氏の家に歸つて中食する。夏居に下婢は一人だけで、皿の持ち運びなどは男の子三人が當番で勤め、食事の卓は談笑で賑ふ。皆に送られて二時半乘り合自動車でバラテルを去て西に向ふ。四時、デー(Dee)の谷川に臨んだバルモラル(Balmoral)で車を下りる。こゝには先女王が好んで住まれた離宮とその宏大な庭とがある。二

三日の中に皇后の行啓があるので、その中には這入れないから、あたりの山に上つて離宮や山河の眺めを見る。なだらかな山々の茂み、その間を流れる清い谷川、それに沿ふた庭の眞中に城廓造りの離宮。やさしい景色はさすが先女王の愛好せられた土地だけある。丘邊の草にねころんで一時間餘も經たが、丘の下の街道に馬車の音がきこえる。見ると遊散のコーチ馬車で、ミラー一家もそれに乘つて來る筈であつたから、丘を下りて皆を迎へる。又一緒に今度は別の山に登る、子供等と共に花を摘むであるく。山を下りて百姓家で茶を飲んでから、ミラー一家は去る。それを見送つたのち、百姓家の庭で西風に吹かれながら次の乘合自動車を待つ。一時間餘もたつて車が來て、又西の方山道を上る。山は少しづゝ迫つて道は谷川に沿ひ並木の間を走る。美しく立ち並んだ林の木々の先きは綠の芝草原が河原にひろがり、その間に城廓造りの別莊も見える。ブレマルの

(Braemar)村に着いたのは七時。この村もアバーデンと同じく花崗岩ばかりの家が散在して、着いたホテルはFife Armsといつて城造りの立派な家。こゝは貴族的な家だから今夜はドレスで食堂に出て見ると、人々も皆盛裝してをる。この山の中でこの樣な貴族の集まりに逢ふのは寧ろ意外であつた。後にきけばスエデンの皇太子夫婦も同宿との事。食後喫煙室で話して後寢室に入る。

八月九日。 山村の日曜。

日曜の朝に日光が添ふて山家の村に開濶な靜けさが充つ。宿の庭から見て、四方の山のヒザーが日光に美しい。

日曜の勤行にはスコットランド國教の寺に行つた。儀式はアングリカンのよりも簡單で、牧師が肩に白い毛をかけてをるのが目立つ。說教は「聖者」の意義で、總てのキリスト教者は聖者たるべしといふに

ある。山家の牧師にこれだけの說敎をきくのは望外であつた。勸行が濟んで後ち中食前には川端の草原を散步、こゝには色々の花がある。

中食後は手紙や日記をかく。茶の前に山手に散步をしたが、朝の天氣に引きかへて雨が來た。E. P. B.は雨を恐れて宿に歸り、自分獨りで微雨の中に山に上る。至る處ヒザーの花のみ。

歸つて茶を飲んでからは又日記かき。夕食もゆふべの樣に貴族的で、食後は皆で集まつて四方山の話し。寢室に入ると、風に雨が加はつて窓を打つ。

八月十日。 山道十里、樂しい家。

朝の八時に馬車でプレマルを出る。クリュニーの谷 (Glen Clunie) に沿ふて山道を上る。空は曇り、四方の山には岩と岩間のヒザーの

みで、川端に淋しそうに木立がある外、家もなく、羊すら居ない、實に荒寥の景色。

ヒザーさく岩山十里風寒し。
枝たれて泣くかと見ゆるかばの木の、
淋しくも立つスコチアの原。

然し、山の裾から高峰まで一面に咲いたヒザーの色は、一面の山々に紫の色を見せる。

荒岩の山を色どる原草を、
さかせし露は天のむらさき。

山が高くなるに從つてヒザーも少くなり、只雜草の原に綿草がゆふべの雨にぬれて立つのと、草間に小な紅白の花が處々に咲くのみ。峠の終りは急坂故、馬車を下りてあるき、花をつみつゝ行く。この峠はイギリス中での一番高い國道だといふが、その高い處を越えて、南

の方、岩山の間に遠く下の連山を見はらす。峠を下る間に四方の山に雲がかゝり忽に雨が來て、その中に霰も交る。馬車の上で傘をさして急坂を下る。雨も過ぎて、うしろの山には尙雲が迷ふて居るが、下の村には日がさす。プレマルから六里來てシー谷の村(Spittal of Glen Shee)で馬車の馬をかへる。その間にホテルに這入つて熱い茶にパンを食べて人心地がついた。ホテルの軒には日光があたゝかく、この山家の一つ家でも都の心地がした。

それからなだらかな坂を上り下り、村家も處々にあり、オックスフォード學生の避暑小屋や、城廓風の別莊を指して一々御者が說明する。日はあたゝかし、馬車の上で一睡する。道は段々下つて谷川は大きく、シー谷から六里でカリー川(Cally)の橋のあたりは川端にこもつた森の間を走る。その對岸に大きな別莊が見える。カリーから三里でブレルゴウリー(Blairgowrie)の町に着いたのは二時。十五里の道

を六時間で來た。そこのホテルで又茶、それから汽車でクパルアンカス(Couper Angus)の村に着き、E.P.B.伯父夫婦の家に入つて親切に迎へられた。旅行中の話しやこの地の話で一家は賑はふ。それから夕食前には村の西に大きな森のある處を散步した。この森は富豪の領地であるが、その屋敷の門番の處には、八つばかりを頭に七人の子供が遊んで居る。E.P.B.の來たのを見て、おぢさんが來たといつて母親を呼びに行く。母親は出て來て「お歸りでしたか、お客さまも一緒に。おばさんに花を持つて歸つてください」と言てつゝけにしやべつて、庭に出て花をとつてくれる。その間に父親も出て來て、その應接室に這入ると、七人の子供のあるに似合はず、清潔にして、そこらを油畫や寫眞や陶器で飾つてある。日本では隨分立派な人の家にもこれだけの應接室はないと思はれる。門番でさへこの通り、イギリスの富の多いのには驚かれる。

持つて歸つた花で食卓を飾つて夕食の机は又旅行中の話しで賑はう。食堂の窓から東南にはオキル(Oehill)の丘が連なつて、夕暮の沓然たる色が美しい。その山の一つはマクベスの芝居の最後の場であるダンシナン(Dunsinane)の丘で、その頂には今も石垣の跡があるとの事。麥畑の中の立木には夕方の青い煙が立ちこめ、丘の色は段々黑くなる。その中にうす雲を通して丘の上にまるい月が出る。靜かな田舍家に友人の一家と共に月を眺めて、異國にあるとも思はない。偶然に得た知己も心友になる、スコットランドの田舍にもホームを得る。人間の遭逢は妙なもの。袖のふり合せも他生の緣といふが、この樣な遭逢を思ふと、人間の一生には前にも永い因緣結び付きがあれば、これから後にもつゞくかと思へる。

疲れたであらう、早く寢るがよいといはれて、各寢室に這入る。窓から北を見ると、今日越えて來たグランピアの山脈は影の如く横はつて、その上にはまだ夕あかりが殘つてゐる。日本の秋ならば蟲も鳴くが、この野には蟲の音もなく、村の寺に鳴る鐘が十時を告げて、その音は野の空にひゞく。

八月十一日。 谷崎の別莊。

朝は少しおそくおきて、九時に皆で朝飯をしまふ。今日は皆でブレルゴウリーの川に行かうといふので、十時に汽車で昨日のブレルゴウリーの村に行き、それから昨日馬車から見た川の上の別莊、クレイグホール(Craighall)の森に行く。門を入つてから半里、川に沿ふた道の兩側は高い樺やファーの木立で、その木の下にはしだの類や、ロードデンドロンが茂る。その道が盡きて牧場が一方にあり、その先には花壇に圍まれて城廓造りの別莊がある。この領地は或る陸軍大佐のものであるとの事であるが、この道だけでも非常の費用を要した

であらうと思へる。その先は川の崖に沿ふて山道を上る。二百乃至三百尺の崖が屹立した下にはシーの流れが岩を廻り、淵となり瀨となつて流れ、崖の上兩側は茂つた森の木立が美はしい。この山道を二十町餘も行つて、崖の見はらしに苔の小屋があり、そこからは川の淵瀨、その上の岩角に建つた別莊を一目に見亘す。その兩岸の木々が紅葉した時にはどんなかと思はれて、そゞろに高尾の紅葉を思ひ出した。伯父夫婦は苔小屋に止まつて、二人で尙先の山道を四五丁行くと、小な瀧があり、その崖からは物凄いほど深い淵を見下ろす。苔を集めて元の處に歸り、岩角のヒザーの上に坐り、日にあたつて川を眺める。その崖の先に紫鐘 blue bell (イギリスでは hay bell) といつて桔梗に似た花が咲いて風にそよぐ。それを摘まうとすると、伯父夫婦はこの崖で花をとらうとして崖から落ちて死んだ人があるといつてやかましく止める。考へて見れば、見た花を總て摘みと

るのは此も一つの煩惱。ゲーテの花の詩にもその事をいつて、花は元の處にさかせておけといふのを思ひ出す。

底深き千尺の崖の岩角に、
風にそよぎて桔梗花さく。

元の道をたどつて、ブレルゴウリから汽車で家に歸つたのは四時。それからは讀書。夕飯の後には村の牧師が來て快談。その中には又ゆふべの處に出る。日誌を終つて寢室に入るのは、今十二時。

八月十二日。 一日の安靜。

E. P. B. は朝から用事でダンデーに行つた。留守の間は書齋で讀書。中食の前には村の北の川端を散歩。南はオキル、北はグランピアの連山に青綠色々の色が日に映じて、その間には木立の野や森、田舍の閑靜の景色に見とれつゝ一人で野を行く。

午後は又ゆつくり休む。E.P.B.は歸つて來て午後の茶をすませて後に、二人で村を散歩。花園を作つてをる人々の家に行つて花を見る。村の富豪達が、この瘠地に肥やしをし、寒い氣候の中に花を作る熱心には感服する。

夕食の後は長い間談話。今晩は十時に寢室に歸る。これから摘花を整へて寢に就く。一週間の旅行に摘花の數が澤山になつた。

八月十三日。 ダンデー、蕃師の家、離別。

打ちつゞいた夏の晴天に田舍の朝景色。おき出で庭を散歩して此をクバルアンガスの最後の朝、スコットランドの田舍の別れと思ふと、その閑靜な野山に別れが惜まれる。朝飯の机で一家の人々にも別れを惜む。伯父夫婦に別れを告げ門口まで見送れて、E.P.B.と共にステーションに行く。汽車を待つ間にも村の人々に話しをする、何

にも晴天でよい、結構な夏などいふので持ち切る。汽車は出て段々南の方の山に上る。綠草の原につゞいた山々、綠樹の間に秀でる城廓造りの家々など、暫くながら親しんだこの山地の眺めも山を上り盡すと共に見えなくなり、程なく製造所の烟が見え出す。山を下つて河端に出るとタインの橋が長蛇の如く水面に延び〳〵亘る。

ダンデー(Dundee)に着いて市中を見物する。商業や製造の町ながら、上品な作りの家も多く、商業會議所、取引所などのゴシック造りの家が立て並んだ廣場にはバーンスの銅像が立つ。星を眺めて亡妻を想ふ詩人の姿を商業の中心に立てるスコットランド人の氣風には實利以外に何物かゝある。

博物館も可なり陳列がある。畜では　マクファーターの谷川の大幅が特に目につく。その實際の山水を見て後、その畜を見ると、畜で見てその山水を想像したのと別種の趣味がある。事前の理、理後の事。

畫を見畫を樂むものはどうしてもその一方に偏する。それを併せ見得るのは畫師自らであらう。

中飯はダンデーの東一里餘りブルテーフェリー(Broughty Ferry)でする約束があるので、その方に急いだ。烟突の町を離れてからは林樹丘陵の海岸。入江の兩方は砂丘が海に迫つて、その渚には水浴の人の姿がうざ〳〵動く。日本でならば、まだ水は寒いといつて中々水浴もせぬ位の暑さであるが、この國では此をはつせば年中水浴の時はない。F.P.B.と二人砂丘の上の椅子にかけて、入江から外の海面を眺める。一人はあの海が故郷デヂマルクの空と思ふであらうし、一人は海原を見て遠い日東に歸る航海の事など考へる。爽かな日光にあたり、涼しい濱風に吹かれて、二人は共に無言。久しぶりで會つた友も今日は復別れなければならぬ。無言の中の心は二人とも同じであつたであらう。

丘を下りてE.P.B.の曾て居た家、畫家グリーヴ(Grieve)を訪ふ。夫婦とも黒い髪のロシア風の容貌で、その凹んだ黒い眼に子供の樣な無邪氣な愛嬌を湛えて二人を迎へてくれた。それから旅行の話し畫の話し、畫室で作品を品評しながら、四人一團に奥底なしに快談。クリーヴ氏はワッツ風の畫を多く畫くが又スコットランドの山水やバリの眺めを銅版畫にしたのも澤山ある。四人で中食して後、庭のテントに出て茶を飲み煙草をふかして、何故君はそんなに早くスコットランドを去る。もつと此處に居て、一つ君の肖像を僕にかゝせ、日東男兒の畫姿をスコットランドに留めておかないかなど半日の交友百年の知己の如くである。

その中に汽車の時間も迫る。グリーヴ夫婦に別れを告げ、E.P.B.と共にダンデーに歸つた。四時に汽車は出る。友はプラットフォームに立つて見送つてくれた。こちらも汽車が廻はつて見えなくなる

まで手巾を振つた。會者常離、どうも仕方がない。

程なくトキードの長橋も渡り過ぎ、山一つ上るとダンデーの入江も町も見えなくなる。聖アンドリュースの町を海岸の遠方に見た後に眠つてしまつて、目がさめると、エデンバラーの入江に水を隔てゝその山を見る。虹の樣に入江を横ぎる橋は世界一の長橋。それを渡つて暫くで身はエデンバラーに入つた。

元のホテルに着いて、それから市中の故蹟を見る。ノックスの家は三百年前のまゝ。大寺や昔の國會など、煤びた建物にこの町の古が偲ばれる。丘の上の古城に上る。幾十丈の斷崖の突つ立つた上に城壁を築いて、一方なだらかになつた方のみに門がある。門をくぐり石段を上つて牙城の壁上に立てば市中からあたりの山河皆脚下に集まる。この堅城に據つて土豪を切り從へ、スコットランドを統一したスチュアート家の威勢の形見、今は兵營になつて、その兵卒のスコッ

トランド風の服裝にのみ古の面影を偲ぶ。日は西に入つて夕霧に四方はかすむ。古城の中にはスコットランドの袋笛 (bag-pipe) を悲しげに鳴らすものがある。月夜にでもこゝにこの笛を聞いたら、詩人でなくとも懐古詩中の人となるであらう。

城を下り、自由敎會の神學校にノックスの像を見、城の下、窪みの土地を園にした間に立つ。街上には、燈がきら〳〵し始めて、公園の芝草の上には、尙夕日の紅が殘んの色を留めて居る。

八月十四日。 グラスゴウの見物、博覽會、繪畫。

今日はグラスゴウ行きときめて朝汽車で西に向ふ。霧がこめて近くの烟突から出る烟が空になびき、遠の山々は有るか無きかの如くかすかに見える。

グラスゴウに着いたのは十時すぎ。黑い樣な赤い樣な霧の中に、

煤びた市廳や紀念碑が立つ。電車で市中の最も賑かな町を通つて西の方公園の博物館に行く。館は博物や工藝や美術を一館に集めたものであるが、その繪畫は隨分多い。然し特色として見るべきものは少い。フ゛スラーのカーライル肖像は今まで寫眞で見て知己の感がある。この畫師が日本に來て日本畫に感服したのは爭ふべからざる事實で、ロンドンにある橋の畫の如きは、殆ど浮世畫の模倣の樣である。こゝのカーライルも色合は日本畫の紺青が古びた樣な工合で少し陰鬱な落ち付き案配の全體に能く適する。その外筆の省略、裝飾の質素、皆日本畫風があると共に能くカーライルの人物を表はし、沈思の人の肖像に能く似合ふ。然し此の畫に日本風があるといふのは、色あひと筆つきだけで、その全體の沈鬱な深奥な點はどうしても北地精神の產物で、日本の畫には決して見られない深邃の調子がある。

博物館を裏に出て、向ひの丘の上には大學の建物が建て連り、その高塔が巍然と聳える。尖りの多い初期のゴシクで少し寺めくか、丘の上の建物には特に適する。學校は休みで閉してあるが、中庭や、會堂下のヴォールトには這入れる。懸賞や演習論文などの廣告を見ると、哲學にはカントに關したもの、神學にはスコットランドの教會史に關したものが多い。

公園內で中食をする。青木の間の田舍家で、このさわがしい製造町の中とは思へない。公園の丘の上をあちらこちらあるいて、見晴しから市中や港內を見ても、霧で半ば影の樣に見える。

それから電車で市中を橫斷して、東の方の大寺に行く。此も古い時代のゴシクで、中はうす暗く十三四世紀の空氣を呼吸する。がその窓ガラスは此頃作つたもので派手やかな色合や寫眞風の陰影がこの堂に適しない。堂の後はアクロポリス(Acropolis)と名付けた墓

地で、丘の上に色々の墓が建て連り、その中央にノックスの紀念碑がある。「スコットランドの文明や自由を與へた人」とある。宗教改革の役者の中でもノックスは特にスコットランドの國民的代表者で、その國の氣風を代表して居る。墓地からの眺めは、大寺とそのぐるりの古墓の芝原を外にしては、市中の家ばかり。大寺の隣り、古墓地の間に喰ひ入つて、而かも病院に近接して、何か新しい工場が立ち、烟突が出來かけて居るなど悲慘の事である。工場などは、も少し外に建て得る。何も墓地の間に喰ひ入る必要はなからう。スコットランドにもやはり日本と同じ樣な心のない人があると見える。

グラスゴウを去つたのは四時で、五時にエデンバラーに到着。それから直に電車で市中を過ぎて西の郊外の博覽會に行つた。ロンドンのに比べては固より遙に小規模で、陳列も少く、多くは賣品店と飲食や娯樂の場になつて居る。只美術館のみはスコットランドの名

畫を公設の博物館や私人の所有の中から集めて來て、中々數も多く特色のあるものもある。

特に目を引くのはマクタガルト (Mac Taggart) の畫で、この人は一體風景畫家であるが、その風景に子供を入れない事はなく、何れの作も皆天然と兒童との配合で、或は野原に牛羊と遊ぶ子供、海岸に貝で戯れる子供、舟に乘つたり泳いだりする子供。天眞無邪氣の子供が裝もない赤裸々の天然の中に遊ぶ。子供が天然の中で多幸である樣に、自然界が又兒童で活かされる。その作が十八もあるが、年代が後になる程筆や色を省略して最近の作などは全で狩野派の畫を見る心地がする。遠い島などは墨の一刷で仕上げ、近くの岩や浪も多少の色を配合して三筆四筆で出來上つて居る。その筆つきの力などターナー風を尙清楚にしたもので、色彩の間にはカンワスの地味のままにした處も多い。今まで油畫を見る度に、油畫ではどうして、

も一面を塗りつけ〳〵して、繪具でべた〳〵にしなければならぬか、日本畫の樣に筆と共に色彩も幾分は省略する事が出來ぬか、と疑問を起した。今このマクタガルトを見るに、油畫として一筆一刷の力は十分に現はれて、而かもその省略工合は日本の狩野派を見る樣で、こゝに西洋畫には稀有な淸楚の趣味が出來た。日本では日本畫に似合はない陰影を入れて、おぼけの樣な畫を畫く人が出來ると、他方には此の樣に淸楚の趣を發揮して、天然と兒童とを一生の仕事にする畫師もある。

この陳列にはマクファーターのものは小なものしかない。その外にはグレンコーの雪嵐、山中の三本樺、カークエルの海岸など、スコットランド特有の風景畫が特に目につく。然し、やり方は英國派と大した違ひはなく、特別にスコッチ派といふ點も見えない。夜になつてから電氣燈の光りで此の陳列を見ると、通常の極彩色風といふべ

き油畫は一層引き立つて見え、マクタガルトの如き淸楚の畫はその面白味を失ふ。そこで思ふには、近頃の多くの畫は天然の日光よりもガス燈や電光燈に適する。特にフランスの畫師などは多くガスの光りで見た樣な畫を畫く。それを又日本で眞似して新派だとか何とかいふ。中世紀の畫が寺院內の薄暗がりの光明に適し、又畫師はその薄暗がりに養はれた眼で物を見る。此頃の多くの畫師は電燈の光りの中に多く生活をして、その眼で畫をかくから天然の光りに遠いものを作る。此から後、開濶の空氣、新鮮の光明に接してその趣味を發揮する畫師が二十世紀の大立物にならうかと思はれる。それにしても最も開濶の光明に接し得るイタリヤの畫師にまだ十分その風の見えないのは遺憾である。空氣が稀薄な樣な心持ちがし、光明の薄く白くすき通つた樣なスコットランドにマクタガルトの如き畫師の出るのは自然の事なから、その自然が事實に現はれ始め、

たゞけは面白い。

電燈に畫を見得たのはこの博覽會の特別の賜であつた。九時の閉館後場内を廻ると餘興や何かゞ賑はしい。日本の賣店には雜貨のみある、その中にイタリアのモサイクをも混ぜて賣つて居る。

宿に歸つたのは十時すぎ。高いホテルの寢室から見ると古城の屹立した下に公園の電燈が星の如くにきらめく。此がスコットランドでの最後の夜である。

花つみ日記終

花つみ日記

著作權所有

明治四十二年六月十日印刷
明治四十二年六月十三日發行

定價金壹圓參拾錢

著者　姉崎正治

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　市川七作

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二百四十番　博文館

◎文學博士 姉崎

宗教學概論

全一冊

洋裝菊判上製
紙數六百頁
正價金壹圓五拾錢
郵稅金拾貳錢

本書の特色は從來の比較宗教學或は宗教史より一歩を進め廣く事實を蒐集し材料を包括し、心理、倫理、社會の諸方面に關する統一的説明を施したるにあり、宗教の科學的及人文的研究に一系統を創始したるは實に本書の抱負とする所なり、著者は斯學專攻の學士、今般歐洲留學の門出に際し、本書を殘して以て講學者の參考に供す、吾人人生に最切の關係を有する宗教的意識、宗教の行動、教會の性質及宗教の社會的勢力等に關する研究に進まんと欲するの士は須らく一本を座右に備へらるべし。

上世印度宗教史

全一冊

洋裝菊判上製
紙數二百九十頁
正價金七拾錢
郵稅金拾錢

著者嘗に一般の印度宗教史を著して江湖に歡迎せられしが今特に太古より印度佛教の消滅に至る上世印度の宗教史につきて斬新の研究豐富の材料を鍛練して此新著を公にせり婆羅門教より佛教の宇宙的宗教を生じた乘教印度教の靈湧き龍躍る變化を經て終に佛教の衰滅に轉ずるの跡歴々掌に指すべし最も多趣にして又佛教の源泉たる上世印度の思想宗教につきて東洋西洋研究の結果を見んと欲する諸君は請ふ此書に就け。

◎正治君著書

ハルトマン氏 宗教哲學

全一冊

洋裝菊判四百頁
並製正價金四拾錢
郵稅金八錢
特製金五拾五錢
郵稅金拾五錢

宗教の問題は世間驚々たるも宗教の何者にして如何なる成立を有すべきやに到りては世人呆として力なしとの嘆を發するに過ぎず宗教哲學は此根本問題を明にする者也宗教の實際問題も學術研究も宗教學を經て初めて其方針を決するを得べし本編はカント、ヘーゲル、シエリングの宗教哲學を統合し批評し、吠檀多の無宇宙論佛教の涅槃論を精査して東西宗教の粹を蒐め古今哲學の結果に依りて宗教哲學の一大系統を組織したるものなり苟も人生の大問題たる宗教に懸念する人は此書を以て指針となさば理論に實際に堅固なる基本を得ん

美の宗教

全一冊

洋裝中判上製
紙數四百九十頁
正價金壹圓
郵稅金八錢

○緒言○言語の美○藝術は美の創作○戯曲○音樂○人生は精神美を開發する修煉の場○愛は美の所生○個人から見た美の宗教○社會の方面から見た美の宗教と國民的生活○宇宙は美を目的とした意匠○實在と人格の完成○佛教の根本○實在、超在と含蓄との神○靈魂、業報、輪廻○涅槃と修行○我れとは何ぞや○現代の文明と藝術と○天然の活殺○事實と觀念、寫實と理想○藝術と活動的生活○天然の趣味と歴史の趣味○ワグネルの理想外數十項

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東京二百四十番 博文館

佛教美術

文學博士 前田慧雲君著

全一冊洋裝菊判紙數三百八頁
並製正價金四拾錢郵稅金八錢
特製金五拾五錢 郵稅金拾錢

日本は美術國なり、而して其原流は佛教によりて開發せらる、即ち日本美術を知らんとせば必ずや佛教美術の研覈を忽諸に付すべからず、今や美術研究の聲喧しきにも拘らず、未だ日本美術史だも編著せられざる所以何ぞや、他なし原始根元の如何なるかを知り且つ導くものなきに由れり前田博士は碩學の大家なり、茲に佛教美術を原始的に考究し、其發達及び形狀につき、懇篤なる編述を了し、而も南條博士の校閲を經、我帝國百科全書の一部として茲に之を出版するを得たり嗚呼是れ我美術研究上の一曙光にあらずや、又斯道を益する決して尠少ならざるものなり。

日本佛教史

文學士 石原即聞君著

全一冊洋裝菊判紙數三百八頁
並製正價金四拾錢郵稅金八錢
特製金五拾五錢 郵稅金拾錢

佛教の初めて我國に傳來せしは今より一千三百五十二年の昔の本なり其間時に弊害なきにあらざりしも我國の文明に貢獻せし處實に尠しとせず斯く我國の文明に多大の關係を有する一大宗教の傳來起原若くは教義に心を用ゆるは少くとも現代學者の義務なり模範第三佛教中學校必頭文學士石原即聞君夙に茲に着眼し今や本書の著あり由來我國佛教史に關する書少からずと雖も其多くは專門家の手に成り一般人士の解しがたきもの多し然るを本書は此缺陷を補ひあらゆる諸書を參酌して治革的系統を立て最も平易に其變遷を叙述せられたれば日本佛教の歷史を知らんには無上の良書なり

發兌元 東京市日本橋區東京町三丁目二百四十番地 博文館

世界宗教史

文學士 加藤玄智君著

全一冊洋裝菊判紙數三百廿頁
並製正價金四十錢郵稅金八錢
特製金五拾五錢郵稅金拾錢

主觀的空想の思辨を排し確乎たる史的事實に據りて宗教學はんとするは近く十有餘年間に於ける時代精神の思潮なり加ふるに最近交通開闢の日一日其至便を致し來るや四海比隣萬國一家の有樣を實現するに及べり此に於てか人は最早佛教者若くは基督教の如き私有宗教の歷史を知りて弱り安んずる能はず今や更に進んで世界に於ける各宗教の全般に亘りその發達開展の有機的關係を史的事實に照して比較攻究する世界歷史に待つあるや日に切なるあるを覺ゆ本館夙に愛に見るあり思想界輝下の急務に應ぜんがためにメンジーズ氏宗教史の飜譯を以てす原書が平易にして要を拔き而かも科學的敎述たるは謂ふ迄も無く譯文亦簡明暢達歐文に慣れざる人と雖も秋毫難解の恨なし請ふ宗教學に志ある士は勿論江湖の學者宗教家は一本を藏めて机上の好伴侶たらしめられんこと

宗教新論

全一冊洋裝菊判上製
紙數七百頁
正價金壹圓
郵稅金拾錢

熱誠なる信仰は眞摯なる宗教の智識に侍ち鞏固なる道義の大本は清健なる信念の根底を要す然るに現今信念界の動搖は職として健全なる宗教的智識の欠乏に基す著者此に慨するあり夙に大學に在りて公平無私東西の宗教を科學的に比較研究し哲學科學の批評的新光明に照して宗教の本性を明にし然かし深く宗教の實際方面に同情し信念の新基礎を確立せんと擬す是れ本書特色の存する所なり宗教家は元より尚も宗教學を研究せんとする人は必ず一讀して其幽玄を探究せられよ

發兌元 東京市本郷町 博文館

巖谷小波君著

小波 洋行土産

全二冊洋裝新形美本
紙數
正價一冊金壹圓貳拾錢
郵稅一冊金八錢

著者が先に伯林大學の招聘を機として椽大の筆を提げ遠く獨逸國に遊びしことは、世の遍れく知る所なり。此度歸朝して齎らす所果して何者ぞ？只見る洋行土産一部二卷、著者が彼地に往來せる前後二年の間、其の鷹の眼に映じ、其の兎耳に觸れしもの、網羅して此裡に盡せり。裝釘は彼地に於ける最新式の體裁に鑑みて、意匠を凝らし、裝飾を極め善盡し、美盡す。正に是れ錦上花を添へ、珍器佳肴を盛るの觀あり。世人一たび之を繙かんか、居がらにして海外の事情に通じ、世界の風土を察するを得ん。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東東二百四十番 **博文館**

故大橋乙羽君著

歐山米水

山水建築 寫眞銅版 舶來光澤紙
風俗美人 百五面 彩色八遍摺 菊判五拾六頁挿入

全一冊 和洋折衷美裝
正價金壹圓五拾錢
郵稅金拾錢

卷頭

大勳位侯爵 伊藤博文君題字
橋本雅邦翁筆 智慧文珠の圖 (石版眞蹟)
寺崎廣業君筆 上臈普賢の圖 (極彩色木版畫)
中村不折君筆 放牛田家の圖 (極彩色木版畫)
光村利藻君筆 雪の金閣寺 (極彩色石版畫)
(巴里博覽會金牌逸品)

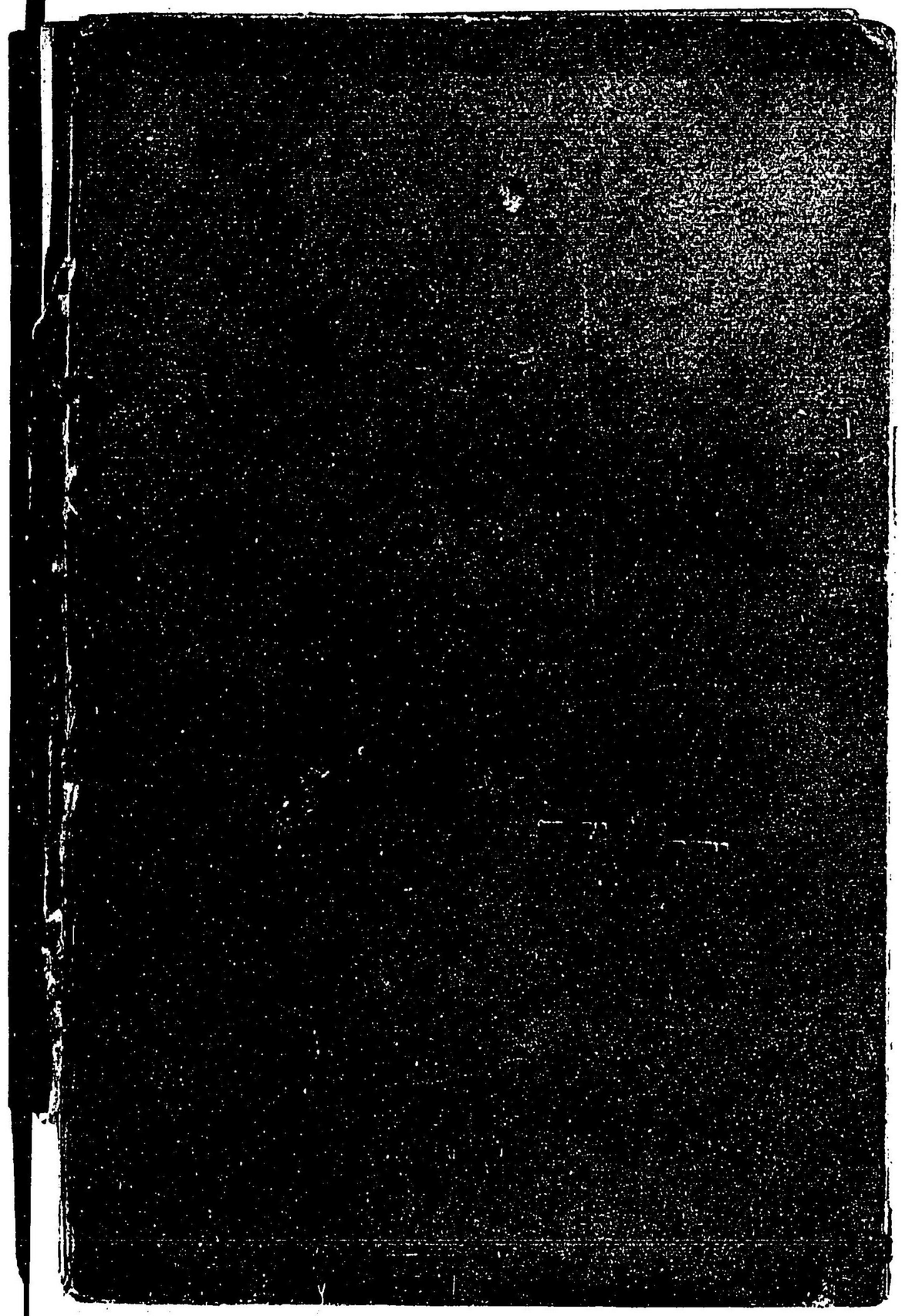
旅行癖美術癖を以て知られたる乙羽君、歐米の山水に遍遊し、各國の都市を觀察し、更に巴里の大博覽會を視、ライプチッヒ連藝の大會肆を歷觀して、海峽の絕美絢繪なるを歎じ其美術の發達せるに感じて我出版業の幼稚なるを慨し、歸來見聞する所を記して此書を著はさる、繪畫、彫刻、寫眞、製版、印刷、製本の技に至るまで總べて第一流の名工を選びたれば、其美其繪獨り我國未曾有なるのみならず、之を歐米の書店に陳ずるも必ず遜色なかるべきなり、卷中挿む所の寫眞版一百圖、瑞燦人目を眩す、著者が萬金を投じて一本を購はゞ座して世界を遍遊すると齊しく、著者が萬金を拋つて得たると同一の見聞快樂を博するを得べし、嗚呼文廉の至りなるかな。

博文館發行

◉姉崎正治、述作、編輯目錄

	既刊	頁數（大さ）	年月	代價	出版者
印度宗教史考		八一四（菊判）	明治一年八月	一〇〇	金港堂
ハルトマン宗教哲學		三九四（菊判）	明治五年九月	〇〇	博文館
佛教聖典史論		一九〇（四六）	明治三年二月	五〇	經世書院
宗教學概論		五九〇（菊判）	明治三年二月	一〇	早稻田大學
上世印度宗教史		三一四（菊判）	明治七年十一月	七〇	博文館
復活の曙光		四六七（四六）	明治七年十二月	七〇	有朋館
現身佛と法身佛		二九〇（四六二倍）	明治七年十一月	七〇	有朋館
Buddhist and Christian Gospels.		二四七（四六二倍）	明治一年五月	一〇	有朋館
國運と信仰		五八六（四六）	明治一九年四月	一〇	弘道館
脚本		一四四（四六）	明治四四年十月	一〇	春陽堂
滝口入道		三八〇（四六）	明治四五年八月	非賣品	博文館
宗教美					
Religious History of Japan.					
The Four Buddhist Agamas in Chinese.		一五〇（菊判）	同四十二年五月	二五〇	Kelly & Walsh.
花つみ日記		五八六（四六）		一三五	博文館
福音中佛教と音樂	出版豫定年月	四十二年末秋	同四十三年		出版豫定年月
根本佛教		四十三年初			

259
534



特13
72

026859−000−7

特13−72

花つみ日記

姉崎　正治／著

M42
ADF−0040